



WINPEC Working Paper Series No. J2402

August 2024

安田傘下の日本昼夜銀行  
—経営再建と 小口信用貸付—

阪東 峻一

現代政治経済研究所

(Waseda INstitute of Political EConomy)

早稲田大学

# 安田傘下の日本昼夜銀行 —経営再建と小口信用貸付—

阪東峻<sup>1</sup>

## 要旨

本稿は、安田傘下の日本昼夜銀行の経営状況に注目して、安田傘下入り後の経営改革、小口信用貸付を始めた理由とその波及効果を中心に分析する。日本昼夜銀行は浅野財閥系の機関銀行だったが、経営難から安田傘下入りし、戦時期に安田銀行に合併されるまで存続した。不況と低金利の下で、日本昼夜銀行は都市の中小銀行として生き残りを図るために、支店拡大や昼夜営業などの経営改革を行って預金獲得につとめた。さらに、小口信用貸付を始めるが、それは安田系列内で独自色を出すことと新規の顧客獲得を図ろうとしたことが理由であった。貸出規模はそれほど大きくなかったが、結果としては預金の獲得に貢献する波及効果があった。日本銀行の考査で経営問題として指摘された浅野や安田向けの融資は、固定化が継続していたが、小口預金を有価証券投資に振り向けて利ざやを稼ぐ銀行に転換したことで、景気の回復の後押しもあり業績は好転した。日本昼夜銀行の取り組みは、戦後の都市銀行が行った個人顧客に注目した大衆化路線の嚆矢的な存在の一つであった。

## はじめに

本稿では、安田傘下の日本昼夜銀行の経営史に注目する。安田傘下入り前後の銀行の経営状況と、その後の経営改革を経て、小口信用貸付開始に至るまでの道筋を明らかにしていく。同行はなぜ小口信用貸付を始めたのか、以後の銀行経営にどのような影響を与えたのか、を明らかにしていく。

戦間期の日本経済は、不況による中小銀行の破綻や金融不安から、五大銀行などの大手行や郵便局に預貯金が集まった。戦間期の金融業界の特徴を語る上で、「重層的金融構造論」という考え方が広く知られている。要約すると、系列化が進み、上層部の巨大都市銀行が、下層に位置する二流ないし三流都市銀行や地方銀行に対して、株式保有や役員派遣や業務提携を行い、経営規模による重層性が存在したとしている。また、特定の企業に集中して融資を行う機関銀行の特徴も残っていたという（伊牟田（1980）,7-14）。また、重化学工業化に伴う、低利、長期的、かつ巨大な資金の吸収が必要となり、その資金調達の方法も多様化したことから、各社は信託業や保険などの金融事業に進出したとされる（寺西（1982）,368-369）。

本稿で議論する安田<sup>2</sup>傘下の日本昼夜銀行は、元は浅野昼夜銀行といい、都市の二流銀行か

---

<sup>1</sup> 早稲田大学大学院経済学研究科研究生・早稲田大学グローバルエデュケーションセンター助手 Email:(s-bando@aoni.waseda.jp)

<sup>2</sup> 安田財閥は四大財閥の一つで、幕末に安田善次郎（1838～1921）が江戸で始めた両替商が起源である。1880年設立の安田銀行と第三国立銀行を軸に金融事業を発展させ、日清戦争期には全国有数の銀行家になった。その後は保険業の進出と経営危機に陥った銀行を傘下に

つ浅野<sup>3</sup>系の機関銀行的な性格の強く、第一次世界大戦後の不況期に浅野系企業が経営難に陥った影響を受けて、1922年に安田傘下に入った（齋藤（2002）,83-99）。安田傘下入り後は、安田が株式を保有し、安田保善社から役員が派遣され、急速に経営改善が進み、安田系の中心的な銀行の一つとなり、戦時期の1943年に安田銀行に吸収合併された（富士銀行調査部百年史編さん室編（1982a）,544-547）。当時は浅野時代の芳しくない印象は拭い去られ、安田のブランドを背景に、預金が増大して業績は改善したと評価されていた（帝国興信所日報部編（1929）,67-70）。急速なイメージ刷新と経営改善は大いに注目されるが、安田傘下以降の日本昼夜銀行の詳しい経営史的な研究はなく、銀行の社史や安田財閥に関する書籍<sup>4</sup>に断片的な記述があるに過ぎず、経営実態が明らかにされていない部分が多く存在する。本稿では、これまで取り上げられてこなかった同行の経営者の言説にも注目しながら、安田傘下入り後の同行の経営的变化や推移を明らかにする。

また、安田傘下に入った他の銀行に関する経営史の研究は、既に幾つかある<sup>5</sup>が、後述するように日本昼夜銀行は安田傘下の銀行の中でも際立った特色を有していた。日本昼夜銀行に注目した本稿の研究が加わることで、日本昼夜銀行という安田傘下の一銀行の特徴だけに留まらず、安田財閥の全体像がより見えてくるであろう。

また、これまで盛んに研究がなされてきた巨大都市銀行に比べて、都市の二流ないし三流銀行は、金融機関として果たした役割や立ち位置が不明瞭であり、その後に巨大都市銀行に吸収合併されて、現存する史料が限定されることから、必ずしも研究の蓄積は厚くはない。近年、東京を地盤とした川崎銀行と第百銀行（粕谷（2021））の研究が行われているが、日本昼夜銀行に注目することは、都市の二流ないし三流銀行の実態解明にも繋がるのである。

---

組み入れていった。非金融業にも進出したがうまくいかず、融資を通じて事業財閥の浅野財閥との関係を深めていった。善次郎の存命中は独裁的性格が強く、財閥本社は安田保善社といった。浅井（1993）の「安田銀行」「安田財閥」「安田善次郎」を参照されたい。安田財閥に関する研究では、創業者の安田善次郎の経営思想をはじめとして、主に金融財閥の形成と発展の経緯を明らかにするために、傘下銀行の分析と、財閥本社である安田保善社による傘下企業の株式構造や経営幹部の特徴について研究が進められてきた。安田保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）、由井編（1986）、由井（2010）がある。

<sup>3</sup> 浅野は創業者の浅野総一郎（1848～1930）が、1884年に官業の深川セメント払い下げを契機として事業を成長させ、炭鉱や海運に進出した。明治末から第一次世界大戦期には、京浜間の埋立工事を行い、浅野造船所や浅野製鉄所を設立して、京浜工業地帯の基礎を作り上げた。服部（1979）の「浅野財閥」「浅野総一郎」を参照されたい。

<sup>4</sup> 安田保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）、富士銀行調査部百年史編さん室編（1982a）、由井編（1986）などがある。

<sup>5</sup> 安田の大合同以降に、単独行として存続した11銀行に関する研究は以下がある。第三十六銀行は早川（2020）、安田貯蓄銀行は浅井（1982）、大垣共立銀行は浅井（1976）、十七銀行は宮地（2018）、正隆銀行は高嶋（1984）・迎（2012）がある。第三銀行は富士銀行調査部百年史編さん室編（1982a）、大垣共立銀行は大垣共立銀行編（1997）、十七銀行は福岡銀行（1969）、第九十八銀行は千葉銀行調査部編（1975）、栃木伊藤銀行は、足利銀行調査部編（1985）、高知銀行（のちの四国銀行）と関西貯蓄銀行（のちの関西銀行）は、四国銀行百年史編集室編（1980）に旧行時代の記載がある。

さらに、同行は 1930 年に無担保の小口信用貸付を開始したことで知られる（安田保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）,568）。戦間期における都市の新中間層や労働者は、商工業者のような事業向け融資には該当しないため信用制約に直面し、借入をする際は、親戚や知人に頼るか、高利貸しか質屋などを利用するしかなかったという（小島（2015）,91-105）。小島（2015）では、日本昼夜銀行の小口信用貸付を紹介しているが、同行がなぜ小口信用貸付に乗り出したのか、取り組みの経緯やその後の銀行経営への影響は触れておらず、分析の余地がある。戦間期の日本の市中には、質屋や高利貸しなどの従来からの庶民金融が存在（渋谷（1979）,井奥・鎮目（2014））し、競合相手も多数ある中で、銀行が貸し倒れリスクのある融資を無担保で始めた要因、商機があると考えた理由は考察が及んでいない。戦間期の金融の多様化の観点からも、同行は特色ある経営を行っており、分析する価値があろう。

都市の中間層をターゲットにしたビジネスは、単に銀行側のビジネス拡大という供給サイドの要因によって開始されたわけではなく、需要サイドの顧客側にもニーズがあったのではないであろうか。特に新中間層が増えた戦間期の日本での社会構造の変化と大きく関係していたと、筆者は考えている。本稿で用いる新中間層（史料により俸給生活者としている箇所もあるが、俸給生活者の上位層を指す新中間層とほぼ同義である。）の説明と定義をしておく。「旧中間層」は自作農や商工業者を指し一方で、戦間期の大都市に誕生した新しい中間層を「新中間層」と呼んだ。大企業の会社員や中央省庁などの上級公務員が該当する。新中間層の所得は中程度以上で経済的には恵まれ、高等教育機関を卒業した高学歴の社会的エリートであった。人口に占める割合は 10%にも満たなかった（門脇（1988）,231-235）。当時流行した郊外住宅や婦人雑誌（新中間層の妻が主な購読者）などの文化生活の担い手でもあった。つまり、戦間期の都市には新たな消費者と潜在的な資金需要が生まれたのである。新中間層をターゲットにした新たなビジネスを展開した企業や業種も存在し、近年では百貨店や郊外住宅などを事例にした研究が行われている<sup>6</sup>。日本昼夜銀行の小口信用貸付も、戦間期の消費社会の中で誕生した新しいビジネスと捉えることが出来よう。新たな消費者が生まれたことは銀行にとって潜在的な金融ビジネスのチャンスになったのである。

さらに、戦間期の巨大都市銀行は、重化学工業化の進展に伴い、電力や鉄道会社の社債引き受けなどに力を入れた一方で、個人を相手にする金融機関は、都市では質屋や無尽会社、農村部では無尽や頼母子講であった。巨大都市銀行も中小企業や個人商店との取引はあったが、個人の消費向けの貸付などは行っていなかった。これに対して、戦後の銀行は、高度経済成長期には企業への設備投資融資を積極的に行いつつ、消費社会の到来を受けて個人向けの消費

---

<sup>6</sup> 各小売業の取り組み事例として、神野（1994）の三越、和田（2011）の資生堂、満菌（2014）の月賦販売、廣田（2007）の公設市場などがある。野田・中島編（1991）は、新中間層が住んだ東京郊外の住宅地の開発を取り上げた。新中間層の妻を購読者に抱えた婦人雑誌は、木村（2010）などがある。

者ローンや住宅ローンにも参入した。戦前と戦後では、融資を受けようとする個人と銀行との関係は大きく異なり、日本昼夜銀行の取り組みは、銀行が個人へ融資<sup>7</sup>を行う画期的な取り組みであり、銀行史の観点からも注目に値する。

同行の経営に関わる史料は、浅野昼夜銀行と日本昼夜銀行の『営業報告書』に加えて、日本銀行金融研究所所蔵の考査資料「実地調査」（1932年と1937年）を用いる。期間は1922年の安田傘下入り後から、同行が安田銀行に吸収合併されるまでの1943年までを分析対象とする。

## 1. 安田系列への傘下入り後の日本昼夜銀行の経営の推移（1922～1943年）

日本昼夜銀行は、1898年に神奈川県足柄下郡吉浜村（現在の湯河原町）に吉浜銀行として設立された。その後、経営者が変わり日東銀行や第五銀行と改称し、1916年に経営権が浅野に移った。浅野はアメリカ・フィラデルフィアの「Through Night's Bank」を模範とし、昼夜営業制（午前9時から午後8時）にして行名を日本昼夜銀行（初代）とした。1918年には浅野昼夜銀行に名称を変更した（安田保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）,566-568）。一方で、この時期の浅野は重化学工業への進出と旺盛な投資を行い、同行は浅野系の機関銀行として関連企業への融資を担った。しかし、第一次世界大戦後の不況期に浅野セメントや東洋汽船の業績が急速に悪化し、浅野昼夜銀行も経営難に陥った（小早川（1981）,42-64）。

安田は銀行業を始めた当初、安田銀行と第三銀行のみで、その後経営難に陥った銀行を救済し、多くの銀行を傘下に収めた。地方は都市より金利が高いことや季節変動があることなどに商機があると考えて、地方金融や地方経済との繋がりを強化した（由井編（1986）,278-290,311-313）。1921年5月、浅野財閥全体の経営の深刻化と水力発電や埋立事業などの新規事業に投資する資金が不足し、浅野総一郎は安田善次郎に浅野昼夜銀行の経営再建を依頼した。浅野は事業で、安田は金融で、それぞれの得意とする分野で経済界を牽引してきた間柄で、安田も浅野の提案に興味を示して受け入れたとされている（日本昼夜銀行（1923）,11-12,由井編（1986）,363-367）。しかし実際の所、不良債権が多い浅野財閥の機関銀行であった浅野昼夜銀行を、安田が傘下入りさせた理由は、好機ではなく救済であったと指摘している（齊藤（2002）,83-99）。また、浅野と安田は富山の同郷かつ旧来の友人であり、浅野が潰れた場合の財界に与える影響の大きさ、浅野の安田への金融依存の高さもあった。浅野の安田からの借入金は膨大であり、浅野が倒れると安田も倒れることを意味し、安田は浅野から手を引けない状態にあったという（迎（2023）,172-187）。1921年9月に、安田善次郎は暴漢に暗殺

---

<sup>7</sup> 日本昼夜銀行に追随する形で、他行が同様のサービスに参入し、庶民金庫も設立されるなどして一定の発展と広がりを見せたことは、小島（2015）でも指摘されている。

されるが、浅野昼夜銀行救済の約束は守られ、安田の死後の1922年8月に傘下入りし、同行は再度、日本昼夜銀行（二代目）と名前を変えた。

戦後不況期に、安田は日本昼夜銀行を含めた多くの銀行を傘下に収めて大金融グループになった。傘下銀行整理のために、1923年に傘下の11行を安田銀行に吸収合併した。「安田の大合同」と呼ばれる。（安田保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）,581-594）。安田銀行に合併されず、安田傘下の銀行として存続した銀行もあった。残った銀行の特徴と残した理由は、前向きな理由が多かった。第九十八銀行（千葉）、十七銀行（福岡）、大垣共立銀行（岐阜）は県内の有力行であった（浅井（1976））。第三銀行（東京）は株式取引所との取引が多く、第三十六銀行（東京）は八王子に本店があり製糸関連へ、栃木伊藤銀行（栃木）は麻や生糸や米穀など、地域の産業に融資していた（早川（2000））。安田貯蓄銀行（東京）は、普通銀行と貯蓄銀行の分業規制のため存続した（浅井（1982））。ところが、日本昼夜銀行が残った理由は他行とは異なり、後継銀行の社史では、同行は傘下入りして間もなく、再建途上という理由が挙げられている（富士銀行調査部百年史編さん室編（1982a）,239-240）。

安田傘下入り後の日本昼夜銀行は、株主（表1）の構成が変わり、役員（表2）が刷新された。株式は浅野関係者から安田善次郎<sup>8</sup>が殆どを取得した。役員では、頭取は安田善四郎（善次郎の娘婿）であったが、銀行の現場で実質的な経営を担うのは、安田保善社専務理事の結城豊太郎の他に、安田保善社から日本昼夜銀行に送り込まれた人物らであった。齊藤恂は日本昼夜銀行の専務取締役（のちに副頭取）となり、再生請負人として経営再建の中心的な役割を担った。齊藤は1870年に埼玉県で生まれ、独協協会学校を経て1897年大蔵省に入り、北海道拓殖銀行と日本興業銀行の設立委員などを務めた。1912年に日仏銀行に移り、1917年に安田保善社に入った。銀行業務に精通した人物で、1933年に病死するまで日本昼夜銀行の指揮を執った（帝国時事通信社編（1929）,25）。

表1：浅野昼夜銀行と日本昼夜銀行の株主

浅野昼夜銀行		日本昼夜銀行	
氏名	株数	氏名	株数
浅野総一郎	198,850	安田善次郎	199,000
白石元治郎	200	安田善四郎	100
浅野泰治郎	100	齊藤恂	100
鈴木紋次郎	100	安田善兵衛	100
浅野良三	100	竹内梯三郎	100
伊藤幹一	100	兵須久	100
永島二郎	100	永島二郎	100
		飯田武也	100
		菅原大太郎	100
		高野省三	100
		綿貫清久	100
合計	199,550	合計	200,000

<sup>8</sup> 死亡後も株主名簿に善次郎の名前が残り、名義書き換えがなされなかったと推察される。

出所) 浅野昼夜銀行『営業報告書』1921年上期,日本昼夜銀行『営業報告書』1923年下期より作成。

表2: 浅野昼夜銀行と日本昼夜銀行の役員

氏名	浅野昼夜銀行	日本昼夜銀行
浅野総一郎	取締役頭取	
永島二郎	専務取締役	取締役
白石元治郎	取締役	
浅野泰治郎	取締役	
鈴木紋次郎	取締役	
神山徳平	取締役	
橋本梅太郎	取締役	
安田善四郎		取締役頭取
齊藤恂		専務取締役
安田善兵衛		取締役
高野省三		取締役
兵須久		取締役
飯田武也		監査役
綿貫清久		監査役

出所) 浅野昼夜銀行『営業報告書』1921年上期,日本昼夜銀行『営業報告書』1923年下期より作成。

その後,安田財閥全体では,1925年の共済生命事件<sup>9</sup>や浅野への融資の不良債権化などが預金者の間で噂となり,信用が低下した(由井編(1986),368-374)。1927年の金融恐慌では,庶民金融を扱う貯蓄銀行と並び,日本昼夜銀行でも取り付けが生じた。1927年4月21日は「東京貯蔵ヲ始め安田,川崎等ノ貯蓄銀行ニハ本支店共朝来預金者場外ニ数十間ノ列ヲナシ夜間ニ至ル迄払出ノ請求ヲ受ケタル有様ニシテ,普通銀行中ニモ安田,川崎,日本昼夜等ハ略々之ト同様ノ混雑」という状況で,日本昼夜銀行では浅草・本郷・神田の各支店で預金の引き出しが顕著であり,預金額が減少した(日本銀行調査局編(1969),28-41)。それでも,半年程度で恐慌前の水準に預金額は回復した。

多少の動揺はあったが,経営者刷新と安田の信用を背景に,安田傘下入り後の日本昼夜銀行は預金額(表3)が増えた。傘下入り時1922年末の2,725万円から,1932年末には7,375万円に増大した。金融不安を背景に,大手行に預金が集中する中で,日本昼夜銀行もその恩恵に浴した面があったと言えよう。1932年末の安田傘下の銀行の預金額で,安田銀行(6億6,375万円),安田貯蓄銀行(1億4,168万円)に続き,日本昼夜銀行は三番目であった(各行『営業報告書』)。

『営業報告書』の貸借対照表(表3)の推移を見る。総資産では,浅野時代は1920年上期の資本金増加(500万から1,000万円)もあり,一貫して増加傾向にあり,1922年上期で4,182

<sup>9</sup> 専務理事の結城豊太郎は,傘下銀行の大合同や学卒者の積極採用を行ったが,専制的かつ急進的で,安田傘下の共済生命では反発を招き,結城の排斥運動に発展した。浅井(1993)の「安田財閥」に詳しい。

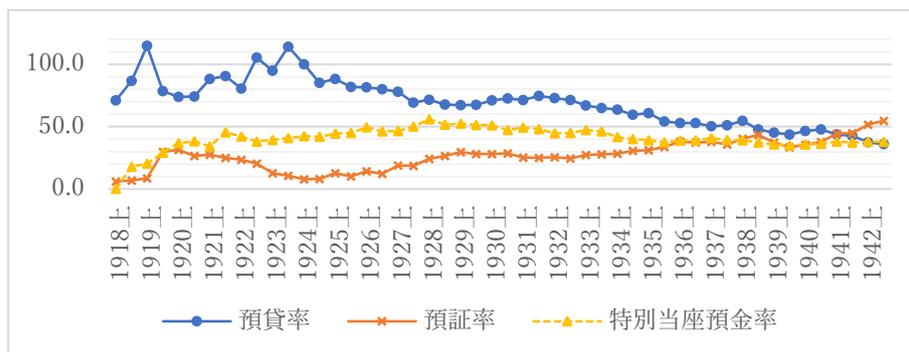
万円であった。浅野時代は借入金とコールマネーで調達した原資を基にして貸出を増やし、預貸率は100%を超えるオーバーローンの年もあった(図1)。

表3：浅野昼夜銀行と日本昼夜銀行の貸借対照表(単位：円)

年	株主勘定	貸出	有価証券	現金	その他	合計	負債	年	資本金	預金	借入金	合計
1918上	3,000,000	18,037,108	831,773	1,297,260	134,988	23,301,133	40	1918上	5,185,052	13,513,140	4,602,938	23,301,133
1918下	3,000,000	21,890,903	1,141,427	907,609	140,941	27,080,883	41	1918下	5,262,543	16,375,133	5,443,203	27,080,883
1919上	3,000,000	24,006,215	1,247,325	1,588,588	133,670	29,975,801	42	1919上	5,341,667	14,435,666	10,198,464	29,975,801
1919下	0	22,606,956	4,510,144	1,220,234	133,751	28,471,092	43	1919下	5,434,074	15,106,717	7,930,297	28,471,092
1920上	3,750,000	24,413,826	6,101,620	2,041,401	132,657	36,439,508	44	1920上	10,705,596	19,407,089	6,326,818	36,439,508
1920下	3,750,000	24,083,233	5,105,916	2,262,873	174,110	35,376,136	45	1920下	10,807,008	19,156,093	5,413,030	35,376,136
1921上	3,750,000	24,555,790	5,708,269	2,634,705	233,154	36,881,922	46	1921上	10,889,093	20,003,318	5,989,506	36,881,922
1921下	3,750,000	26,872,949	5,774,212	2,981,810	374,041	39,753,017	47	1921下	10,953,424	22,173,683	6,625,909	39,753,017
1922上	3,750,000	28,474,588	5,794,758	3,156,779	650,018	41,826,148	48	1922上	10,956,082	24,099,415	6,770,647	41,826,148
1922下	3,750,000	30,294,592	5,724,547	3,905,895	1,000,038	44,675,077	49	1922下	10,446,355	27,250,875	6,977,846	44,675,077
1923上	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	50	1923上	n/a	n/a	n/a	n/a
1923下	3,750,000	46,101,566	4,534,376	6,135,989	1,233,681	61,755,617	51	1923下	10,509,912	41,750,202	9,495,500	61,755,617
1924上	3,750,000	56,562,847	4,553,341	5,387,388	1,196,474	71,450,053	52	1924上	10,591,606	53,662,171	7,196,273	71,450,053
1924下	3,750,000	53,104,957	5,093,669	7,469,804	1,175,745	70,594,178	53	1924下	10,668,610	58,144,479	1,781,085	70,594,178
1925上	3,750,000	55,439,801	7,754,433	4,131,438	1,409,163	72,484,840	54	1925上	10,647,560	60,278,482	1,558,794	72,484,840
1925下	3,750,000	56,197,364	6,768,225	7,634,402	1,462,282	75,812,277	55	1925下	10,651,398	64,312,693	848,183	75,812,277
1926上	3,750,000	58,445,673	9,710,339	4,897,467	1,655,133	78,458,616	56	1926上	10,675,056	66,660,853	1,122,705	78,458,616
1926下	3,750,000	63,609,542	10,337,319	7,474,569	2,250,138	87,421,573	57	1926下	10,694,602	74,228,714	2,498,254	87,421,573
1927上	3,750,000	52,330,174	12,114,319	7,384,698	2,354,021	77,933,215	58	1927上	10,707,488	63,927,450	3,298,273	77,933,215
1927下	3,750,000	54,219,123	13,864,688	11,300,483	2,366,878	85,501,175	59	1927下	10,726,442	73,856,684	918,046	85,501,175
1928上	3,750,000	59,093,398	19,317,980	6,637,111	2,367,534	91,166,027	60	1928上	10,751,044	78,948,598	1,466,382	91,166,027
1928下	3,750,000	57,954,013	21,752,117	10,567,613	2,398,969	96,422,716	61	1928下	10,806,451	81,807,967	3,808,296	96,422,716
1929上	3,750,000	55,553,688	23,649,279	9,033,895	2,406,871	94,393,738	62	1929上	10,810,726	79,650,470	3,932,539	94,393,738
1929下	3,750,000	52,093,102	21,066,309	12,663,506	2,507,806	92,080,729	63	1929下	10,873,869	74,352,147	6,854,710	92,080,729
1930上	3,750,000	52,200,065	19,909,540	10,587,445	2,507,062	88,954,115	64	1930上	10,877,162	70,819,151	7,257,800	88,954,115
1930下	3,750,000	50,981,287	19,416,859	10,484,791	2,609,938	87,242,879	65	1930下	10,885,665	67,908,003	8,449,208	87,242,879
1931上	3,750,000	51,533,110	17,637,811	10,350,782	2,624,375	85,896,083	66	1931上	10,892,742	69,375,373	5,627,965	85,896,083
1931下	3,750,000	53,523,840	17,337,015	10,173,475	2,650,771	87,435,106	67	1931下	10,914,860	68,844,542	7,675,702	87,435,106
1932上	3,750,000	52,477,776	17,717,967	8,058,029	2,616,485	84,620,261	68	1932上	10,920,085	69,278,277	4,421,896	84,620,261
1932下	3,750,000	55,694,630	18,096,880	7,998,027	2,560,323	88,099,862	69	1932下	10,934,332	73,751,833	3,413,696	88,099,862
1933上	3,750,000	55,840,920	22,653,640	6,398,879	2,589,012	91,232,453	70	1933上	10,965,889	79,324,231	942,332	91,232,453
1933下	3,750,000	56,486,101	23,437,438	8,449,800	2,559,362	94,682,704	71	1933下	11,031,155	81,732,283	1,919,263	94,682,704
1934上	3,750,000	61,204,440	26,491,858	8,178,115	2,609,773	102,234,189	72	1934上	11,097,791	90,134,881	1,001,514	102,234,189
1934下	3,750,000	60,824,081	29,820,887	9,738,779	2,544,593	106,678,343	73	1934下	11,198,991	94,170,173	1,309,176	106,678,343
1935上	3,750,000	66,061,354	32,435,420	9,344,897	2,545,834	114,137,508	74	1935上	11,303,779	101,787,478	1,046,250	114,137,508
1935下	3,750,000	67,450,517	36,973,548	10,889,544	2,545,651	121,609,263	75	1935下	11,403,566	108,972,835	1,232,861	121,609,263
1936上	3,750,000	64,760,805	42,582,910	9,853,782	2,460,285	123,407,788	76	1936上	11,517,093	110,710,830	1,179,862	123,407,788
1936下	3,750,000	71,321,464	45,178,568	10,587,485	2,327,108	133,164,628	77	1936下	11,664,091	119,962,333	1,538,202	133,164,628
1937上	3,750,000	74,873,351	48,210,737	10,038,385	2,121,314	138,993,792	78	1937上	11,841,641	125,210,136	1,942,011	138,993,792
1937下	3,750,000	83,948,641	50,445,739	12,156,265	2,095,740	152,396,389	79	1937下	12,012,907	138,691,095	1,692,384	152,396,389
1938上	3,750,000	90,359,270	65,004,922	11,173,081	2,106,245	172,393,522	80	1938上	12,266,075	158,167,289	1,960,156	172,393,522
1938下	3,750,000	111,660,396	80,120,471	17,675,233	2,219,449	215,425,553	81	1938下	12,514,205	200,783,536	2,127,810	215,425,553
1939上	3,750,000	132,300,888	95,494,446	32,160,461	2,338,292	266,044,093	82	1939上	12,819,912	250,971,040	2,253,137	266,044,093
1939下	3,750,000	161,994,160	110,601,583	55,380,926	2,281,796	334,008,470	83	1939下	13,251,103	317,355,172	3,402,191	334,008,470
1940上	3,750,000	192,195,938	130,684,980	40,062,261	2,463,545	369,156,727	84	1940上	13,750,434	350,951,099	4,455,191	369,156,727
1940下	3,750,000	206,808,323	149,216,034	40,378,809	2,531,871	402,685,041	85	1940下	14,428,443	384,167,474	4,089,121	402,685,041
1941上	3,750,000	193,422,046	185,370,743	37,226,059	2,432,824	422,201,676	86	1941上	15,116,467	402,668,776	4,416,432	422,201,676
1941下	3,750,000	216,271,946	205,654,254	41,621,464	2,580,420	469,878,087	87	1941下	15,752,749	449,000,721	5,124,614	469,878,087
1942上	3,750,000	253,144,683	320,487,801	45,502,783	4,921,069	627,806,339	88	1942上	16,390,359	602,363,568	9,052,408	627,806,339
1942下	3,750,000	270,576,206	384,042,895	61,858,660	4,609,419	724,837,182	89	1942下	17,073,460	682,447,768	25,315,952	724,837,182

出所) 浅野昼夜銀行『営業報告書』各期,日本昼夜銀行『営業報告書』各期より作成。48期までは浅野昼夜銀行,49期からは日本昼夜銀行。1923年上期は報告書欠号のため不明。

図 1：預貸率・預証率・特別当座預金率の推移(%)



出所) 浅野昼夜銀行『営業報告書』,日本昼夜銀行『営業報告書』各年より作成。

預金は安田傘下入り後,増加傾向は続いたが,金融恐慌で減り,1927年上期末は前期の7,422万円から6,392万円に減少した。その後は増加傾向に戻るが,1930年から1932年にかけて再び減少に転じた。背景には昭和恐慌の煽りを受けたと推察される。そこで,借入金とコールマネーを増やして資金規模を維持し,借入金やコールマネーが一番多かった1930年下期は775万円にのぼった。昭和恐慌から脱出しつつあった1933年以降は預金が急増して,1942年下期には6億8,244万円となり,1922年下期の傘下入り後から20年間で約25倍に拡大した。

有価証券投資は,1922年は約500万円だったが,預金増加に伴い余資運用として盛んに行われ,1942年には約37億円に達した。投資対象別では,安田傘下入り後も株の買い増しはさほど行われず,株の有価証券投資全体に占める割合は低下した。社債も変化がなく20%代で推移した。国債は,内訳の分かる最初の期・1928年上期には40%であったが,特に高橋財政期には大きく伸びて,1942年には66%を超えた。

自己資本比率は,浅野時代は概ね20%代で推移した。安田傘下入り後は,資本金1,000万円に変更がなく,預金増加傾向に伴い,自己資本比率は低下傾向にあった。

損益計算書(表4)では,収入の内,貸付利息並びに手形取引での割引料,株や債券への投資による有価証券収益を見る。浅野時代は割引料の割合が60~80%代と高く,利息は10%代であった。安田傘下入り後は収入の構造が変わり,利息が上昇して40~50%代になり割合が高まった。有価証券収益は10%にも満たなかった。

費用では,利息・割引料が浅野時代は40~50%だったが,安田傘下入り後は70~80%に上昇した。当期利益金は,安田傘下入り後は20~30万円代で推移したが,日中戦争期には100万円を超えた。滞貸金償却は安田傘下入り後の1922年下期と1928年上期から1929年下期に行われたが,不況期は経営悪化で見送られた。業績の改善が続いた1933年上期から滞貸金償却が再開され,1935年下期には20万円を超え,不良債権処理が進んだ。

表 4：浅野昼夜銀行と日本昼夜銀行の損益計算書（単位：円）

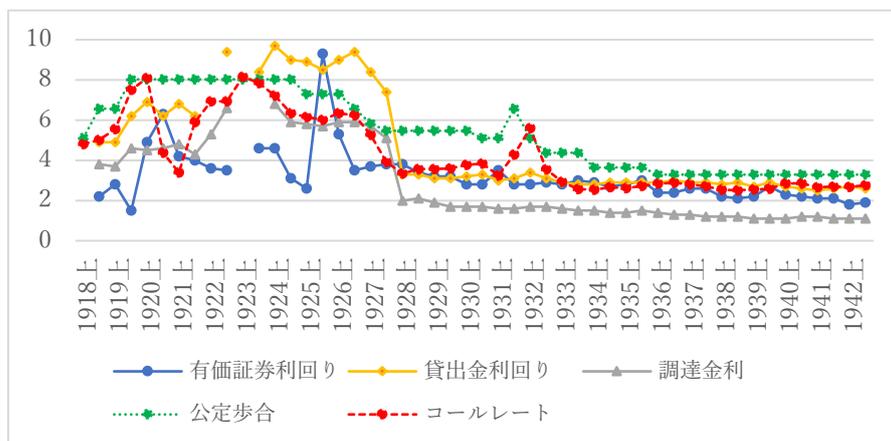
期	年	利息割引料	有価証券	その他	合計	損失	年	利息割引料	有価証券	その他	滞貸金償却	当期利益金	合計
40	1918上												
40	1918上	703,056		6,758	709,817		40	1918上	527,192	1,400	36,664	144,552	709,817
41	1918下	960,165	21,722	9,042	990,933		41	1918下	789,872		41,510	159,543	990,933
42	1919上	1,092,529	33,150	25,064	1,150,746		42	1919上	902,202		69,870	178,667	1,150,746
43	1919下	1,361,879	42,180	51,203	1,455,263		43	1919下	1,107,792	45,577	90,814	211,074	1,455,263
44	1920上	1,551,794	259,753	48,165	1,859,715		44	1920上	1,191,688	123,673	136,753	407,596	1,859,715
45	1920下	1,380,105	354,222	93,991	1,828,321		45	1920下	1,144,451	124,930	153,775	405,162	1,828,321
46	1921上	1,492,730	225,687	92,851	1,811,271		46	1921上	1,230,137		178,883	402,247	1,811,271
47	1921下	1,477,090	218,272	92,344	1,787,709		47	1921下	1,193,724		210,791	383,192	1,787,709
48	1922上	n/a	n/a	n/a	2,114,637		48	1922上	1,479,412		313,606	321,617	2,114,637
49	1922下	2,209,919	194,813	544,110	2,948,844		49	1922下	1,761,950		429,425	229,465	2,948,844
50	1923上	n/a	n/a	n/a	n/a		50	1923上	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a
51	1923下	3,054,629	211,691	148,221	3,414,544		51	1923下	2,607,982		548,797	257,761	3,414,544
52	1924上	4,075,531	197,106	64,236	4,336,876		52	1924上	3,378,092		635,666	323,114	4,336,876
53	1924下	4,059,403	136,786	69,492	4,265,682		53	1924下	3,380,777		559,953	324,948	4,265,682
54	1925上	4,032,828	165,372	85,992	4,282,194		54	1925上	3,495,801		549,210	239,180	4,282,194
55	1925下	3,893,551	678,653	76,125	4,648,330		55	1925下	3,647,208	102,870	673,960	224,287	4,648,330
56	1926上	4,238,678	437,337	56,569	4,732,587		56	1926上	3,956,447		548,585	227,550	4,732,587
57	1926下	4,797,483	350,049	62,884	5,210,419		57	1926下	4,271,855		709,191	229,370	5,210,419
58	1927上	4,490,566	414,440	63,067	4,968,076		58	1927上	4,034,405	150,220	561,366	222,080	4,968,076
59	1927下	3,896,806	498,619	57,778	4,453,205		59	1927下	3,581,046	35,123	611,267	225,766	4,453,205
60	1928上	1,770,547	634,273	68,467	2,473,287		60	1928上	1,513,231	953	689,835	38,440	2,473,287
61	1928下	1,845,107	690,118	94,339	2,629,564		61	1928下	1,681,038		655,756	30,220	2,629,564
62	1929上	1,740,686	719,621	90,788	2,551,095		62	1929上	1,580,718	67,000	658,801	10,055	2,551,095
63	1929下	1,634,554	715,230	89,163	2,438,947		63	1929下	1,369,983	153,255	626,131	23,690	2,438,947
64	1930上	1,626,271	576,892	99,935	2,303,098		64	1930上	1,307,870	159,820	600,343	235,062	2,303,098
65	1930下	1,682,183	545,359	106,040	2,333,582		65	1930下	1,358,902	130,307	609,634	234,739	2,333,582
66	1931上	1,535,875	638,458	109,260	2,283,593		66	1931上	1,229,112	184,711	596,360	38,370	2,283,593
67	1931下	1,577,934	492,834	86,776	2,157,546		67	1931下	1,243,065	100,000	584,564	229,917	2,157,546
68	1932上	1,750,563	482,824	106,683	2,340,070		68	1932上	1,421,319	50,651	637,058	231,038	2,340,070
69	1932下	1,644,971	519,881	103,449	2,268,301		69	1932下	1,330,687	21,500	680,036	236,074	2,268,301
70	1933上	1,550,356	563,074	87,956	2,201,386		70	1933上	1,292,675		629,054	40,244	2,201,386
71	1933下	1,560,101	658,157	88,053	2,306,311		71	1933下	1,302,908		692,522	35,921	2,306,311
72	1934上	1,616,919	694,925	90,655	2,402,499		72	1934上	1,323,833		745,925	56,146	2,402,499
73	1934下	1,716,023	748,222	91,340	2,555,585		73	1934下	1,369,667	76	808,019	65,027	2,555,585
74	1935上	1,767,534	838,490	100,576	2,706,600		74	1935上	1,409,893	170	893,429	80,525	2,706,600
75	1935下	1,848,400	1,033,358	107,223	2,988,981		75	1935下	1,548,925	91	907,627	204,968	2,988,981
76	1936上	1,871,360	943,358	123,075	2,937,793		76	1936上	1,598,073	167	897,435	96,220	2,937,793
77	1936下	1,944,177	1,055,769	121,946	3,121,892		77	1936下	1,523,687	117,571	1,025,687	73,052	3,121,892
78	1937上	2,086,575	1,177,760	116,872	3,381,207		78	1937上	1,574,700	168,236	1,129,141	89,684	3,381,207
79	1937下	2,273,770	1,266,049	149,607	3,689,426		79	1937下	1,637,910	250,079	1,347,726	13,000	3,689,426
80	1938上	2,431,100	1,270,873	174,107	3,876,080		80	1938上	1,821,088	206,001	1,290,114	15,000	3,876,080
81	1938下	2,855,410	1,472,225	207,110	4,534,745		81	1938下	2,143,180	250,577	1,438,283	60,695	4,534,745
82	1939上	3,204,529	1,881,130	306,836	5,392,495		82	1939上	2,568,817	459,763	1,616,197	747,713	5,392,495
83	1939下	4,067,406	2,704,080	391,443	7,162,929		83	1939下	3,203,062	856,369	2,073,917	50,672	7,162,929
84	1940上	4,678,156	2,695,086	479,349	7,852,591		84	1940上	3,813,940	850,454	2,002,267	57,693	7,852,591
85	1940下	5,056,656	2,908,856	552,784	8,518,296		85	1940下	4,317,900	503,260	2,290,886		8,518,296
86	1941上	4,832,061	3,380,082	658,934	8,871,077		86	1941上	4,599,020	208,751	2,384,255	184,779	8,871,077
87	1941下	5,234,641	4,020,756	795,346	10,050,743		87	1941下	4,970,834	320,608	2,977,105	251,643	10,050,743
88	1942上	6,145,003	4,598,888	881,131	11,625,022		88	1942上	5,716,314	350,937	3,865,277	124,332	11,625,022
89	1942下	6,620,131	6,505,352	917,981	14,043,464		89	1942下	6,931,014	1,309,690	4,086,487	65,009	14,043,464

出所) 浅野昼夜銀行『営業報告書』各期,日本昼夜銀行『営業報告書』各期より作成。1922年上期は史料不鮮明のため解読できず。48期までは浅野昼夜銀行,49期からは日本昼夜銀行。1923年上期は報告書欠号のため不明。

諸金利(図2)では,有価証券利回りは,浅野時代には2~4%代,安田傘下入り後は2~4%代で推移した。貸出金利回りは,浅野時代は4~6%代で,安田傘下入り後は7~9%代に上昇した。しかし,1920年代の半ばに,基準レートの公定歩合が引き下げられ,コールレートや市中の銀行の各金利は低金利時代に入った。有価証券と貸出を合わせた利回りが,調達金利を上回る状態にはあったが,有価証券利回りは3%前後で推移しつつも,貸出金利回りと調達金利は59と60期の境(1927年下期と1928年上期)に低下した。利幅が減り,薄利な状況が

続く中で、日本昼夜銀行はビジネスモデルの転換を図った。預金を集めて、貸出や運用金額を増やして、収益を上げていく構造へ変化した。つまり、量的な拡大へ向かった。

図 2：諸金利の推移（%）



出所) 浅野昼夜銀行『営業報告書』,日本昼夜銀行『営業報告書』,東洋経済新報社『東洋経済年鑑』各年より作成。

金融恐慌から昭和恐慌にかけて、普通銀行は貸出には消極的な態度を取るようになった一方で、貯蓄銀行、市街地信用組合、無尽会社が中小商工業者向けに貸出を伸ばした（今城（2001））。日本昼夜銀行でも預金は伸びたが貸出は伸びず、特に国債への有価証券への投資が増えた。この傾向は他の普通銀行も同様であった。昭和恐慌期に国債は値崩れして、金融機関は損害を被ったが、1930年代の高橋財政期には、日本銀行による国債の買い支えもあり、国債は銀行にとり、利回りは低いがリスクが少なく安定した堅実な収益を見込める金融商品になった（鎮目（2023））。特に日中戦争期には国債への投資が盛んに行われた。1930年代後半からの日本昼夜銀行が保有する有価証券の内、国債の割合が急増する点は、国の金融機関に対する国債消化政策の影響があるとみられる。日銀が引き受けて保有していた国債の購入を各金融機関は勧奨された（大蔵省昭和財政史編集室編（1954）,334-353）。一方で、国策の影響は預金面でも見られた。国民の貯蓄が奨励され日本昼夜銀行の預金も増加した。結果として預貸率は低下する一方で預証率は上昇した。預貸率は1932年下期71.4%、1942年下期は35.9%に低下した（図1）。

## 2. 新しい銀行像の模索と胎動

1922年の傘下入りから1932年までには紆余曲折もあったが、『営業報告書』を見る限り、預金額は2,725万円から7,375万円に、貸出額は3,029万円から5,569万円に増加し、純益金は20万円代で推移した。表面的には日本昼夜銀行は再生して安田傘下の中心的な銀行の一

つとなったように見える。しかし、浅野関連の不良債権問題に苦しみ、経営実態は異なっていた。『営業報告書』には表れない経営状況を考査資料から以下で検討する。

1920年代に相次いだ恐慌や銀行の不祥事を受けて、銀行の健全経営確保のために、1927年大蔵省は銀行局に検査課を、日本銀行も考査部を新設した。1928年、日本銀行は考査（実地調査）を開始した。各銀行の信用調査、手形の審査、取引先の経営状況などの把握に努めた（日本銀行（1983）,286-292）。日本銀行考査は信用度の高い三井銀行から始まり、日本昼夜銀行の一回目は1932年、二回目は1937年に実施された。

1932年の日本銀行考査では、日本昼夜銀行の預金は1928年末に8,100万円あったが、昭和恐慌などの影響で1932年3月には約5,500万円に減少した。そこでコールマネー870万円を預金へ付け替えるなどして預金を多く見せる細工をした。また預金支払い資金を調達するため、有価証券を売却し、安田保善社から借入金を増やした。安田傘下となった1922年当時、預金は約2,200万円あった一方で、貸出は約2,600万円であった。その内浅野関連の貸出が約2,100万円で浅野向けの不良貸出が経営を圧迫していた。1932年も貸出約5,300万円の内、安田と浅野関連が約4,400万円で全貸出の83%を占めた（日本銀行考査局（1932）,1-4）。同じく安田系列の安田銀行や第三十六銀行も浅野関連の各企業へ融資を実施していた（表5）が、日本昼夜銀行の状況に、日本銀行は「安田系銀行中ニ在リテモ業容極メテ異常ナリ」（日本銀行考査局（1932）,2）と指摘し、浅野向けの貸出の多くは不良債権であるとの認識を持っていた（表6）。浅野向けの融資3,146万円（浅野同族2,824万円、白石同族120万円、浅野造船所117万円など）の内、日本昼夜銀行側は約780万円が不良債権としているが、日本銀行が精査した所、実際には約1,900万円が欠損見込の不良債権の可能性があることが判明した、とされている。加えて、一般向けの債権約800万円でも、約160万円は不良債権であると認定された。一方、安田向け債権の欠損見込は0であった。

損益状況では、収益は低下傾向にあるにも拘らず、1931年下期は、営業利益率8.6%、純益率5.8%、配当金は5%を支払っていた。（日本銀行考査局（1932）,4）。利益の中には、浅野への貸出に対する利息を計上していた。日本銀行は、実態よりも利益を多く見せており、実際には2割の純損率を計上すべきと指摘している。配当も表向きであり、安田系の他行は配当金5%を出しているの、日本昼夜銀行だけ無配にすると、信用が失墜するからであったという。

「極メテ不良ノ業態ニ在ルニ拘ラス当行カ能ク存続セルハ安田ノ背景ヲ有スル外一般ニ内容悉知ラザルニ因ルヘク」（日本銀行考査局（1932）,6）として、経営実態は表面に現れたものより劣悪で、安田の信用失墜や問題が明るみに出た際は、同行の経営は忽ち成り立たなくなるとした。

また、浅野から安田への経営譲渡の経緯も「当行買取当時保善社カ買取代金トシテ浅野ヨリ肩代リシタル当行ヨリノ借入金ノ利息ハ配当ト同率タルヘシトノ内約アリタルトニ因ルモノニシテ配当金ハ同時ニ利息トシテ収入サル、モノナレハ結局ノ収支ニ変化ナク換言ス

レハ安田ハ無利息借入金ニヨリ当行ヲ買収シタルコト、トナリ」(日本銀行考査局(1932),5)とあり,安田が日本昼夜銀行を買収する際に,同行の負債を安田保善社が肩代わりする形で傘下入りさせた。安田は新たな資金を出すことなく日本昼夜銀行を買収した。安田善次郎の抜け目のなさを感じる。そして,浅野への融資は,安田保善社が日本昼夜銀行から借りているように見せかけ,同額を配当として日本昼夜銀行から保善社に支払い相殺した。浅野からの経営譲渡ではなく,放漫経営から行き詰った安田による救済であった(齋藤(2002),97)としているが,指摘の通りである。

表5: 安田銀行・日本昼夜銀行・第三十六銀行の浅野関連企業への貸出額(1931年12月末,単位は万円)

	安田銀行	日本昼夜銀行	第三十六銀行
東洋汽船	3109.5	0	0
浅野同族	2763.9	2741.5	0
浅野造船	1737.8	116.2 貸付証券2.9	0
浅野セメント	356.0	0	0
東京湾埋立	538.8	0	0
浅野小倉製鋼所	327.3	0	0
白石同族	0	119.9	0
日本鑄造	0	36.6	0
浅野石材工業	8.5	5.4	0
武蔵野鉄道	0	0	40.0
浅野雨龍炭鉱	0	0.1	0
関東水力電気	0	貸付証券0.9	0
合計	8841.8	3019.7 貸付証券3.8	40.0

出所) 日本銀行考査局「実地調査報告 日本昼夜銀行」(1932),25-26

表6: 日本昼夜銀行の債権額(1932年3月末,単位は万円)

	債権額	好ましくない額	欠損見込額
安田関連	1549.8	728.9	0
浅野関連	3146.5	3121.8	1872.7
その他3万円以上の貸出	211.6	163	38
監査書記載不良貸	1.8	1.8	1.5
合計	4909.7	4115.5	1912.2

出所) 日本銀行考査局「実地調査報告 日本昼夜銀行」(1932),8-24

一方で,日本昼夜銀行の経営改革で,特徴的なのは支店数を大幅に増やした点(表7)である。浅野昼夜銀行の本店は日本橋区にあったが,京橋区に移転し,銀座の数寄屋橋近くに置かれた。有楽町駅にも近く,西側は霞が関や日比谷,丸の内などの官庁街とオフィス街,東側には銀座の繁華街がある。浅野昼夜銀行時代の支店は1919年までは京橋のみであったが,1921年には預金吸収のために東京市内7店,市に隣接する郡部1店,青梅町,横浜,鶴見,京都,大阪

にそれぞれ 1 店が加わり,支店は 14 店舗に拡大した。経営が危なく頭取の浅野総一郎が支店付近の有力者を自宅に招くなどの宣伝活動に力を入れて急場をしのごうとした（日本昼夜銀行（1923）,8-9）。1922 年,安田に経営が移ると,青梅と鶴見は廃止され,1927 年までに東京市内に 6,市に隣接する郡部に 5 の新規出店をした。特に郡部では下町と山手の両方に派出所（のちに出張所に名称変更,支店に昇格）の形式で出店した。1923 年の関東大震災では,東京の中心部は大きな被害を受けたが,郊外は比較的軽微で,その後郊外に移住する人々が増えて発展したことはよく知られている。1932 年に東京市は,周辺郡部の 82 町村を合併して,旧 15 区に加えて 20 区が新たに誕生して 35 区になった。1920 から 1940 年にかけて旧 15 区の人口に大きな変化はなかったが,旧郡部（新 20 区）は人口が 4 倍に増えた（『東京府統計書』各年）。つまり,戦間期の東京は,東京市に合併した旧郡部での人口増加や発展がみられた。日本昼夜銀行の新規出店もこうした流れを捉えようとする意図があったものと推測される。他府県では,神奈川は横浜の 1 店,大阪は 3 店,京都は 2 店体制になった。1930 年には 25 支店,1935 年には 26 支店,1940 年には 29 支店と拡大した。

表 7：浅野昼夜銀行と日本昼夜銀行の本支店の変遷

年	本店	日本橋	京橋	両国	赤坂	亀戸	浅草	神田	芝	麻布	江戸川	本郷	深川	駒板	四谷	品川	目黒	上野	池袋	渋谷	三輪	尾久	新宿	青梅	川崎	横浜	鶴見	京都	御旅町	京都西	西陣	七条	大阪	新町	九条	
1919	●																																			
1920	●																																			
1921	●																																			
1922	●																																			
1923	●																																			
1924	●																																			
1925	●																																			
1926	●																																			
1927	●																																			
1928	●																																			
1929	●																																			
1930	●																																			
1931	●																																			
1932	●																																			
1933	●																																			
1934	●																																			
1935	●																																			
1936	●																																			
1937	●																																			
1938	●																																			
1939	●																																			
1940	●																																			
1941	●																																			

出所) 東京興信所編『銀行会社要録』各期より作成。

注目すべきは支店の設置場所である（図 3）。東京の場合は,市電の路線が交わる場所（本店,江戸川,麻布,深川,日本橋,浅草支店）,省線の駅（池袋,亀戸,神田,芝支店）近くに設置した。市電の電停別乗降客数の推移でも,上位に位置する電停の最寄りに支店を置いた。1929 年当時,東京市電には 377 の電停があり,乗降客の順位では,浅草支店は 2 位の雷門,渋谷支店は 6 位の中渋谷,三輪支店は 9 位の三輪車庫前,上野支店は 10 位の上野広小路,本店は 14 位の尾張町の各電停の最寄りに位置していた（東京市電気局（1930）,30-43）。つまり,交通の便が良く,多くの人々が往来する場所に支店を設けた。新規出店も積極的ではあったが,短期間で閉店した支店もあり,支店の経営状況に応じて出退店を繰り返したと推察される。

図3：日本昼夜銀行の本支店の所在地（1936年）



出所) 日本昼夜銀行 (1936) 『営業案内』に加筆。安田傘下入り後に、新たに設置された支店は太字とした。

他行の動向も見ていく。期間は日本昼夜銀行が存続した 1922 から 1942 年で、東京府内に本店があり、支店が府内に 10 以上あった銀行を対象とした。支店拡大は、この時期多くの銀行で実施された (表 8)。他行の買収合併を契機にして、買収合併した銀行の旧支店を引き継いで、自行の支店として、支店網の拡大を図った。しかし、安田系列の銀行 (安田銀行、日本昼夜銀行、安田貯蓄銀行) は、東京では他行の買収合併がないにも関わらず、支店拡大がなされ、それは自力での支店拡大であった。また旧郡部への支店展開は貯蓄銀行と都市二流普通銀行は早くから実施した。一方で、財閥系の大手普通銀行は旧郡部への進出には積極的ではなく、1930 年代後半の他行の買収合併を契機にして旧郡部に支店を設けた。旧郡部の中でも郊外電車のターミナル駅や工業地帯が形成された淀橋、品川、渋谷、豊島、王子、荒川などの区は、支店の設置時期が比較的早かった。

表 8：東京に本店を置く貯蓄銀行と普通銀行の支店数の推移（1923～1942 年）

	貯蓄銀行												普通銀行												合計										
	東京貯蓄			東京貯蔵			川崎貯蓄			安田貯蓄			日本昼夜			川崎第百			第一			安田				三菱			昭和						
	旧市	郡部	合計	旧市	郡部	合計	旧市	郡部	合計		旧市	郡部	合計	旧市	郡部	合計	旧市	郡部	合計	旧市															
1923	9	1	10	15	0	15	12	2	14	16	5	21	8	1	9	16	2	18	5	0	5	15	2	17	4	0	4	—	—	—	100	13	113		
1924	9	2	11	17	0	17	12	2	14	17	10	27	10	1	11	22	2	24	6	0	6	17	2	19	5	0	5	—	—	—	115	19	134		
1925	9	3	12	18	1	19	13	3	16	18	12	30	12	3	15	22	2	24	6	0	6	19	2	21	5	0	5	—	—	—	122	26	148		
1926	9	3	12	18	1	19	13	4	17	18	12	30	12	3	15	27	2	29	6	0	6	19	2	21	5	0	5	—	—	—	127	27	154		
1927	9	3	12	18	1	19	14	7	21	18	13	31	12	3	15	31	6	37	18	0	18	21	2	23	6	0	6	5	2	7	152	37	189		
1928	9	3	12	18	1	19	16	7	23	20	13	33	12	6	18	31	6	37	19	0	19	23	2	25	6	0	6	35	10	45	189	48	237		
1929	9	3	12	18	1	19	16	7	23	20	13	33	12	6	18	37	11	48	19	0	19	23	2	25	9	2	11	25	10	35	188	55	243		
1930	9	3	12	18	1	19	16	7	23	20	13	33	12	6	18	36	11	47	20	0	20	23	2	25	9	2	11	23	10	33	186	55	241		
1931	9	6	15	18	1	19	14	7	21	20	13	33	12	9	21	33	11	44	21	2	23	23	2	25	9	2	11	23	10	33	182	63	245		
1932	9	6	15	18	1	19	11	6	17	20	13	33	12	7	19	33	11	44	21	2	23	23	2	25	9	2	11	23	10	33	179	60	239		
1933	9	6	15	18	1	19	11	6	17	20	13	33	12	7	19	33	11	44	20	2	22	23	2	25	9	2	11	23	10	33	178	60	238		
1934	9	6	15	18	1	19	11	6	17	20	13	33	12	7	19	33	11	44	20	2	22	23	2	25	9	2	11	23	10	33	178	60	238		
1935	9	6	15	18	1	19	11	6	17	20	13	33	12	7	19	33	11	44	20	2	22	24	2	26	10	2	12	23	10	33	180	60	240		
1936	9	6	15	—	—	—	—	—	—	20	13	33	12	7	19	48	15	63	20	2	22	24	2	26	11	2	13	23	10	33	167	57	224		
1937	9	6	15	—	—	—	—	—	—	20	15	35	12	7	19	40	15	55	20	2	22	24	2	26	11	2	13	23	10	33	159	59	218		
1938	13	7	20	—	—	—	—	—	—	21	20	41	13	7	20	39	14	53	20	3	23	24	5	29	11	4	15	23	10	33	164	70	234		
1939	13	7	20	—	—	—	—	—	—	21	22	43	13	7	20	39	18	57	20	4	24	24	5	29	11	4	15	23	11	34	164	78	242		
1940	13	8	21	—	—	—	—	—	—	21	22	43	14	7	21	39	18	57	20	5	25	24	6	30	17	6	23	23	11	34	171	83	254		
1941	14	8	22	—	—	—	—	—	—	21	25	46	14	8	22	39	19	58	22	6	28	24	9	33	17	7	24	23	12	35	174	94	268		
1942	16	10	26	—	—	—	—	—	—	21	26	47	16	30	46	39	23	62	22	9	31	24	11	35	18	22	40	23	17	40	179	148	327		

出所)『銀行総覧』各年より作成。

一方で、昼夜営業は浅野昼夜銀行の特徴を残した。他行の営業時間は午前 9 時から午後 3 時まで、同行の営業は午前 9 時から午後 8 時まで（土曜は午前 9 時から正午まで）（日本銀行考査局（1937）,120-124）で、商工業者に歓迎され広く利用された。行名は浅野昼夜銀行から日本昼夜銀行に変更されたが「昼夜」という言葉を残した点からも昼夜営業に対するこだわりが感じられる。支店拡大を進めていた 1926 年の新聞広告（図 4）では「安田経営」と記して安心感と安定感を強調して、太陽と月のイラストで「昼夜営業」を印象付けた。20 を超える支店と派出所名を掲載して、自宅や職場の近くにも店舗が多数ある利便性を伝えた。

図 4：日本昼夜銀行の新聞広告



出所)『読売新聞』1926 年 5 月 20 日,朝刊,3 面。

しかし、昼夜営業は行員の二交代制（9時-16時、13時-夜間）となり、経費は3割増加して、経費率は1.29%（一般銀行の経費率は1.23%）でやや高かった。（日本銀行考査局（1937）,164）それでも貸出の7割弱が浅野と安田に固定されて貸出事務経費が安く済むこと、店舗（借家の尾久支店以外は自前の店舗）は建物に金をかけておらず物件費が安いことから、総じて運営コストは安く抑えられた（日本銀行考査局（1937）,148）。

預金の特徴に「特別当座預金」の割合の高さがある（図1）。当座預金は商売関係で使われるが、特別当座預金は小口当座預金とも呼ばれ、主に個人が日常生活に使う少額の金を一時期預けておく預金である。株や債券の配当金や利子、月給や賞与などを預けて置き、必要に応じて少しずつ引き出す。引き出しには小切手は必要ではなく通帳だけで可能であった。銀行は引き出される額が少ないので、準備金の用意が少なく済み、特別当座預金は当座預金よりも高めに金利が設定された（山室（1926）,81-83。坂井（1927）,234-236）。全預金に占める特別当座預金の割合は、浅野時代は20~40%で、安田傘下入りした以降は40%（最高は1928年上期の55.9%）を下回ることはなかった。なお、日本銀行の取引銀行全体の特別当座預金の割合は18.7%であった（日本銀行考査局（1937）,4）。1936年下期末の口座は計11.7万口で、特別当座（9.1万口）と当座（0.5万口）が大半を占めており、「一日平均勘定の動きも総額に対し金額は5%程度なるも口数は一割以上を示めす」など、決済口座として広く利用され、小口の預金が毎日盛んに動いていた（日本銀行考査局（1937）,121）。1937年には、日本昼夜銀行には計26支店があり、東京市内の20店舗（他は横浜市1、大阪市3、京都市1店舗）で8,886万円（76.9%）の預金を集めた。預金元では、1億651万円（全体の92.2%）が一般預金であった（日本銀行考査局（1937）,131）。同行は昼夜営業や支店数が多いことから中小商工業に加えて、新中間層の利用も広がっていた。こうしたことが、小口信用貸付が中小商工業に加えて、新中間層も融資の対象に加えられる理由につながったのであろう。

また、乙種銀行<sup>10</sup>の金利の高さもあった。1933年7月の定期預金金利は、甲種銀行3.7%、乙種銀行4.2%（日本銀行考査局（1937）,130）であり、乙種銀行の日本昼夜銀行は甲種銀行よりも金利が高く設定され、預金者には魅力的であった。

1929年には、安田保善社で動きがあった。結城豊太郎専務理事から森広蔵理事になり、安田保善社のトップが交代した。安田の創業者安田善次郎の死後、経営を引き継いだ結城は保善社での決定事項を傘下各行に行き渡らせるトップダウン型の経営をしていたが、共済生命事件などの問題で辞めた。一方で、森は横浜正金銀行と台湾銀行を経て安田入りした（安田

---

<sup>10</sup> 1918年から東京と大阪では、商工業への資金供給の円滑化と預金獲得競争の不当競争防止のために、資本金が大きく信用度のある大手銀行を甲種銀行、甲種より劣る銀行を乙種銀行とした。預金集めのために乙種銀行が甲種銀行より金利を高め設定する預金協定利率が導入された。（山室（1926）,73-77）

保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）,672-680）。森は傘下の関係会社や銀行に経営を任せる方針に切り替えた（小早川（1985））。保善社は関係銀行会社の常務取締役や監査役は推薦するが、事業には一切口を出さず、極めて重要な事項以外は、事後報告を可とした。保善社が関係銀行会社に行っていた検査は廃止して中央集権制から自主分権制に変更した（安田保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）,680-686）。傘下行は経営の自由度が高まり、森体制の変化として、四国銀行ではサラリーマン向けの小口信用貸付が始まった（四国銀行百年史編集室編（1980）,169）が、不況期にあったこともあり、傘下の銀行と企業は合理化を中心に経営改善を進めた。

安田傘下には都市中間層を相手にした安田貯蓄銀行と日本昼夜銀行があった。安田貯蓄銀行は主に集金機能の役割を負った（浅井（1982））。日本昼夜銀行も預金の激増に対して貸出は追いついておらず、多くは国債、社債、株式などの証券に投資されていた。安田は地方の銀行を傘下に収めて地域産業への融資に力を入れてきたが、日本昼夜銀行が都市の商工業者から広く利用され始めた状況を受けて、新たに都市の中間層への融資も強化しようとするようになったのではないであろうか。つまり、系列内での銀行ごとに差別化と特色を持たせるために、日本昼夜銀行は都市の中間層への融資を行う銀行としての役割を期待されていたのである。

1928年の段階でも、日本昼夜銀行支配人の富永静雄<sup>11</sup>は「若し普通の銀行と同じ行き方で行かうとするならば安田銀行と同系列の当行が別個の銀行として今日ある理由を認めません」と述べて、系列内で各銀行が特色を持った経営をすることの重要性を説いた<sup>12</sup>。都市の中間層向けに小口信用貸付を始めたことに対して、齊藤恂は以下のような発言をしている<sup>13</sup>。

「在来は限られた資産家、有力会社を相手にすることが銀行の常道であり、貸出の安全を保持するゆゑんであると考へてゐたのである。だがこの考へ方は事実により裏切られ今やかゝる旧思想を振り捨てねばならぬ。銀行は社会の中堅たる中産階級を対象とすると、彼等に対して貸付割引の途を開くと共に彼等によつてバツクされると、この方が堅実さを増すゆゑんである（中略）欧米の銀行家は早くもこの変化に着目し貸出における大口偏重主義を改め、小口貸付に努力してその口数の増加をすることを理想とするやうになりつゝある。」「中流階級に提供することは安田の伝統方針であつたが、私共が今回の此の挙に出たのは、此の伝統と時代の進運に連れ最新最良のサービスを提供しやうとしたものである」として、世界的な金融業界の流れの変化と中間層の増大をビジネスチャンスと捉えて、数多くの小口との取引によって支えられていること（バツク）が重要であるとして新しい銀行像を掲げた。

---

<sup>11</sup> 富永は、長崎高等商業を卒業後、台湾銀行や安田銀行を経て、日本昼夜銀行に入り、調査課長や計算課長、副支配人を務めた。（松下（1937）,114）

<sup>12</sup> 「日本昼夜銀行」、『読売新聞』,1928年12月11日。

<sup>13</sup> 「中小金融の経験」、『エコノミスト』,1930年6月15日,20-25。

低金利時代に突入したこと、経営の自由度の高まり、都市の中間層相手の取引の増加、預金増大はしたが貸出は伸びず証券への投資が集中していたことなどから、日本昼夜銀行の体質は浅野の機関銀行だった従来の姿から変容しつつあった。都市の中間層に対して貸出を拡大させようとしていたのが1930年に誕生した小口信用貸付であった。また、1932年と1937年の日本銀行考査の報告書にも、小口信用貸付の動向が記載されており、日本銀行も新たな取り組みに注目していた。

小口信用貸付は、主としてアメリカのナショナル・シティ銀行をモデルにした。1928年から特別小口融資を開始して、善良な21歳以上で一定収入があり、貸付額は50ドルから1,000ドルとした。連帯保証人は2人で、有価証券担保の場合は保証人を求めなかった。金利は借入金100ドルにつき、6ドルを差し引き貸し出した。返済は複利勘定で、月一回の12回から週一回の50回まで借入金に相当するまで積み立てた。開始後一年間で約5万人、計約1,600万ドルを融資し、用途は生産資金ではなく消費金融であった。積み立てを怠り法律の手続きを受けたのは1%以下であった。この状況を齊藤副頭取は「同銀行の成績を見ると非常によく一般俸給者に活用され、その回収も九分九厘までよく行つてみますので私のところのも相当の成績をあげるを確信してをります」と意気込んだ<sup>14</sup>。大衆消費社会が到来して好景気に沸く1920年代のアメリカで同様のビジネスが成功を収めたことを受けて、日本でも新しい金融商品の展開に乗り出した<sup>15</sup>。

### 3、小口信用貸付の開始

俸給生活者向けの小口信用貸付は1930年1月4日から開始された。『昭和4年日本銀行調査月報』では、日本昼夜銀行は利用者数と貸付総額の市場規模は「府下在住の俸給生活者を約三十万人と推算し其の割の三万人を利用者と見、一人当りの平均融通額二百円即ち六百万円見当迄の需要は有之もの」と見込んだ（日本銀行調査局編（1963）,1409）。同時期に不動貯金銀行が類似した金融商品を提供する予定だったが、貯蓄銀行法に定める貯蓄銀行業の業務に逸脱することから認可が下りず日本昼夜銀行が業界初となった<sup>16</sup>。融資対象は中小商工業者と俸給生活者であった。俸給生活者向けは50円から1,000円で、期間は1年、年利8%とした。100円貸す場合は92円を渡し、金利8%は貸出時に回収した。一種のリスク軽減策で金利分だけでも回収できる態勢にしていた。対象は25歳以上の既婚者で、東京市内か

---

<sup>14</sup> 「米国の実例も成績がよい」、『東京朝日新聞』,1929年12月19日。

<sup>15</sup> 欧米では1910年代に小売でチェーンストアビジネスが誕生した。その後、アメリカ発の新しいビジネスモデルが日本でも模倣され、森永製菓・明治製菓・敷島製パンの食品会社、高島屋十銭ストアなどの均一価格店などでチェーンストアビジネスが展開された。（石原・矢作編（2004）,219-225）

<sup>16</sup> 「俸給生活者への金融 保善社の手で復活 明年1月から日本昼夜銀行で貸付開始と決まる」、『東京朝日新聞』,1929年12月19日。

近接町村所在の官公庁か相当なる会社銀行に2年以上勤続し、今後も勤務の予定があることを条件とした。保証人は2人以上で、雇い主か上役、同僚等とした。中小商工業者は、保証人は3人以上で、貸出限度額は無担保では1,000円、有担保は2,000円とした。貸出額に大差はないが、保証人の数では俸給生活者の方が商工業者より一人少なく、銀行側は俸給生活者の信用度を商工業者より高く評価していたことになる。

小口信用貸付の申込は本店のみで行い、①借主と保証人の勤務先と住所、②借主と保証人の資産と年収、③借主の略歴、④借主の家族と戸主関係、⑤借主の家計費、⑥使途と予算、⑦返済方法の各書類の提出を求めた。返済は月賦が原則で支店での取扱も可能とした。返済は借りた翌月から始まり繰り上げ返済も受け付けた（時事新報社経済部編（1931）,6-14）。緊縮財政下のため大蔵省指導で投機や遊興費への貸出はせず、贅沢品や必要以上の消費財等への使途は禁じ11項目（①教育費、②保険料、③税金や賦課金、④定期乗車券の購入費、⑤転宅費と敷金、⑥衣服費、⑦出産費、⑧医薬治療入院費、⑨葬祭費、⑩旧債償還、⑪家庭経済の増進資金）に限った<sup>17</sup>。これはモデルのナショナル・シティ銀行とは異なる点であった。

小口信用貸付の初年、1930年1月から12月の申し込み総数は871口に達した。審査後642口に計約17万1,000円が貸し付けられたが、銀行が当初想定した額ではなかった。『実業之日本』は「一年間の貸付総額約十八万円として、八分の利率として一万五千円の利子収入となる。しかしこれから預金のコストを差引けば、仮りに五分として七千五百しか残らぬ。三人の係員がこれに掛り切つてみるとすれば、一年七千円の利益では、人件費にも足らぬ」と厳しい声もあった<sup>18</sup>が、『大阪朝日新聞』によると、返済の期日前に繰り上げ返済を行う人が半数を占め、銀行員らを驚かせた。「試みとしてはまず成功」「サラリーマンに対する無担保信用貸の危険は先ずその恐れなしと折紙をつけられたというべし」と伝えた<sup>19</sup>。齊藤恂副支配人も「現在の成績は貧弱であっても、此儘堅実に、其の歩みを進めるならば、将来我国でも相当社会に貢献するところ甚大であらうと思ふ。（中略）其の利用者は七千万国民中最も多数を占める階級の人達であるから、将来は必ずや相当の発展を為すことは疑ひないところである」<sup>20</sup>と将来性に期待した。貸出を本店に限定して、保証人を求めるなど審査も慎重かつ厳重に行い、使途も限定するなど、手間をかけて慎重に行った。買い出し額は伸びなくても、貸し倒れが少なく済む結果に繋がった。審査を緩めて、貸出を増やすことも出来ただろうが、浅野関連の不良債権を抱えていた同行は、小口信用貸付によって新たな不良債権を生み出す恐れもあり、放漫経営はせず、堅実な銀行経営をしようとした。俸給生活者と商工業者の両者と

17 「ぜい沢には貸さぬ」、『東京朝日新聞』,1929年12月19日。浜口内閣が1929年7月に発足し、緊縮財政を行い、金解禁を目指した。10月29日にニューヨークの株価が暴落した直後の11月21日に金解禁を発表し、1930年1月11日に金解禁をした。

18 「サラリーマン金融」、『実業之日本』,1931年5月15日,43。

19 「勤め人貸付 初一年の成績」、『大阪朝日新聞』,1931年1月9日。

20 「サラリーマン貸付の将来は?」、『経済雑誌ダイヤモンド』,1930年11月21日。

も返済率は高く、貸し倒れは少なかった。煩雑な事務手続きは銀行の負担ではあったが、リスク軽減策の観点からは効率的であったと考えられる。小口信用貸付を始めた 1930 年上期の貸出金利回りは 3.2% であり、小口信用貸付は 8% の金利が期待できた。当時一般的であった質屋や高利貸しよりは金利が安く、期間も 1 年と長く、従来の庶民金融のサービスとも住み分けられ差別化を図った。

さらに、相当なる会社銀行や官庁に勤務するためには、大学などの高等教育機関を経た高学歴者ではならず、絶対数も少ない社会的エリートであった<sup>21</sup>。日本昼夜銀行が求めた貸し出し基準の背景には、社会の情勢や価値観が反映されていよう。新中間層への融資に関する信用リスクは、貸出対象を学歴や勤務先などの社会的ステータスによって選別することで軽減された。官公庁や大企業は倒れるリスクも小さく、組織に勤務していれば定期的な収入が期待でき、返済が滞るリスクも小さいとみなされた。官公庁や大企業の信用を背景にして、その個人に貸すのである。齊藤副支配人は既存の銀行貸出を「物を見て人や仕事を見ない」<sup>22</sup>と発言したように、新たな信用ビジネスを評価する声も有識者からはあった。金融を専門とした大阪商科大学教授の楠見一正は「一般に金融業者は消費的信用に関与しない事を原則とすると共に、又貸出の確実性を期する点に於て物的担保を要求するのと常とするを以て、之等の要件に合致し得る望みの最も少ない俸給生活者には適當なる金融を与へらるゝ由もなかつた。(中略) 如斯適當なる物的担保を有せざるが故に、全く見離されてゐた俸給生活者は實際担保となるべき何物をも所有せぬであらうか、(中略) 俸給生活者に於ては確定俸給である。一定の時期に於て一定の俸給が規則正しく取得せらるゝことは、中小業者者に於ける投下資本の生む利潤に匹敵するものであつて、受信の基礎として相當の価値を有するであらう。而も又彼等は概ね知識階級に属する人々であつて尊重すべき人格の所有者である。俸給生活者は直ちに現金に換へ得べき有形財産こそ持つてゐないが、彼等は確定収入を人格とを提供することが出来、借金を返済するに充分なる能力を有してゐる」(楠見(1930), 34-35) とした。新中間層は定期的に比較的高収入があり、知的教養も高く期限を守って金を返す人々であることから、サービスが成り立つとしている。

俸給生活者向けの累計融資は 1930 年 1 月から 1932 年 4 月末までで 1294 口の 36 万 5,274 円であり、同時期の中小商工業者向け融資の三倍程あった。1935 年 9 月には、本店に加えて、横浜、大阪、京都の 3 支店でも貸出が開始された<sup>23</sup>。1936 年 6 月には金利 8% から 6% に下げた<sup>24</sup>。小口信用貸付の 1 口当たりの貸出額は、1931 年 3 月末の 272 円から、1937 年 2 月

---

<sup>21</sup> 若者の立身出世への願望や学歴社会の形成は、武田(1999)、天野(2005)、麻生(2009)に詳しい。

<sup>22</sup> 「中小金融の経験」、『エコノミスト』, 1930 年 6 月 15 日, 20-25。

<sup>23</sup> 「サラリーマン金融 昼夜三支店も取扱」、『読売新聞』, 1935 年 8 月 22 日。

<sup>24</sup> 「昼夜銀行小口貸出利下げ」、『読売新聞』, 1936 年 5 月 30 日。

末（累計 4,678 口の 129 万 1,000 円）には 349 円に上昇した。貸出金額ベースの内訳を見ると、旧債償還が減り、医療と冠婚葬祭と家庭経済増進が増える傾向にあった（表 9）。小口信用貸付サービスの浸透、好景気などが要因と考えられる。こうした資金需要は、社会保険制度が未熟な時代に、急な用立ての際などに発生したのであろう。貸し倒れの割合も低く、取り扱い店舗を増やし、金利を引き下げたりするなどして、地道に客層の開拓を進めたようである。

表 9：小口信用貸付の俸給生活者向けの口数と融資額（1937 年 2 月 20 日現在）

	口数	金額(万円)
教育	258	4.7
保険	142	1.7
税金	17	0.2
定期購入	74	0.4
転宅敷金	111	1.5
衣服	142	3.0
出産	389	6.9
医療	1,532	41.8
冠婚葬祭	605	15.1
旧債償還	901	32.8
家庭経済増進	507	20.8
合計	4,678	129.1

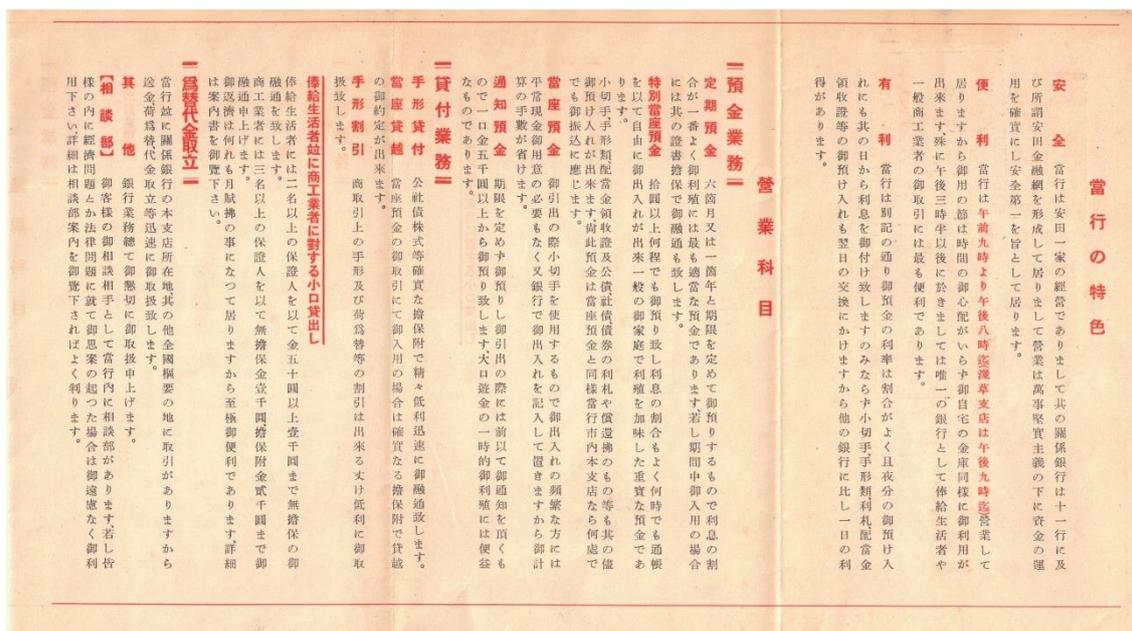
出所) 日本銀行考査局「実地調査報告 日本昼夜銀行」(1937) ,85-89

一方で、中小商工業者向けの小口信用貸付の 1932 年 4 月末の累計融資状況は、154 口の 13 万 7,840 円であった（日本銀行考査局（1932）,37-38）。1930 年前後の五大都市では、貯蓄銀行や無尽会社、信用組合が中小商工業者向け融資を盛んに行い（今城（2001））、日本昼夜銀行と競合していた。1933 年 7 月、齊藤洵の後を受けた川崎清男副頭取は就任挨拶で「同業者の競争は毫も緩和する事なく、地盤の開拓、得意先の争奪等激化する一方でありまして、特に当行の如く三都内の有力銀行間に介在しまして、二十有餘の店舗を持ち汎く大中商工業者その他凡ゆる階級を得意先とするものに於ては、彼我の営業戦線は想像以上に接触緊逼して居り、我若し一步退けば、彼一步を進むと言ふ洵に息詰る様な間髪を容れざる状態」（川崎（1959）,69）と訓示した。1935 年段階の商工業者向けの融資は、申込は 656 口で 446 口は断った。融資総計は 19 万 1,940 円で、用途は商品原料仕入資金 163 口（14 万 5,840 円）、営業設備改善拡充資金 36 口（3 万 3,700 円）、家屋店舗修繕拡充資金 5 口（5,200 円）、旧債償還 6 口（7,200 円）であった。担保は、信用 116 口、家屋担保 50 口、電話担保 22 口、有価証券担保 15 口、商品担保 7 口であった。

経営幹部らも厳しい融資環境の現実を知ることになり発言にも変化が見られた。東京市の中小企業担当者向けの講演で富永静雄支配人は、営利で銀行が中小商工業者へ融資する難しさとして、小売業は参入障壁が低く数が多いため淘汰されやすいこと、産業組合や購買組合が融資をしていることなどを挙げつつ、審査の手間と調査手数料がかかることや、特に少

額の手形取引は経費倒れの状態にあるとした（富永（1935）,1-7）。かつて齊藤恂は「中小商工業者の金融も方法がないのではなく、銀行家が考へ方を変へれば立派に営業となし得る」<sup>25</sup>と語ったが、富永は「普通銀行として所謂庶民金融というようなものは不可能であるという結論に私は達したのであります」と、貸出にかかるコストが大きく、利益にならないとした（富永（1935）,1-7）。それでも1936年の『営業案内』には「俸給生活者並に商工業者に対する小口貸出し」と棒線を引き営業科目の独自性を強調した（図5）。1937年2月では、小口信用貸付の枠内における中小商工業者向けの新規の小口信用貸付は殆ど行われてなかった（日本銀行検査局（1937）,89）。日本昼夜銀行の預金額は、1930年の6,790万円から1935年の1億897万円に伸びた。一方で、同期間の貸出は5,000万円代で推移して変化はなかった。小口信用貸付が開始されたのは昭和恐慌の最中の1930年であり、小口信用貸付の貸付金額が伸びなかった背景には、経済状況が悪く、銀行が貸し出し審査を厳格化したこと、ライバルの金融機関の台頭などがあると考えられる。

図5：日本昼夜銀行の営業案内



出所) 日本昼夜銀行 (1936) 『営業案内』

#### 4. 経営改善と金融サービスの大衆化

一方で、小口信用貸付は貸出額の増加だけを目的とはせず、預金を集める手段としても意図されていたのではないかと考えられる。銀行に口座を持ち、日常的な取引関係があれば、預金者は急な用立てが発生した場合には、日本昼夜銀行から融資を受けられた。大手会社や官公庁に勤務し、

<sup>25</sup> 「中小金融の経験」, 『エコノミスト』, 1930年6月15日, 20-25。

保証人がいればよかった。質屋や高利貸しに比べ、融資期間も中長期で低利かつ比較的多くの融資額を手に出れた。銀行と利用者双方にとってメリットがあった。

安田傘下の11行では、1923年の預金額を100とした場合1942年は、安田銀行621%（安田財閥傘下中8位）、安田貯蓄銀行2,408%（同2位）、日本昼夜銀行1,649%（同3位）、肥後銀行6,573%（同1位）であった<sup>26</sup>。全国普通銀行総預金は1923年から1942年までに465%上昇した（後藤（1970）,118-119）。安田財閥傘下の各銀行は安田の信用を背景として、他の大手行や郵便貯金と同様に預貯金の吸収と集中が順調に進み、全国普通銀行総預金の上昇率を上回った。特に、安田傘下で東京を地盤とした安田貯蓄銀行と日本昼夜銀行は、預金を伸ばした。小口信用貸付は同行が見込んだ程の貸出額には至らなかったが、「小売商人、料理飲食店業者、俸給生活者等ヲ相手トシテ専ラ小口ノ預金ヲ吸収シ居リ（中略）預金ハ保険、瓦斯、電燈ノ諸会社、放送局等ノ集金ノ預入ニ利用スルモノ漸増シ漸次夜間営業ノ利便カ世間ニ認識セラレツ、アル」（日本銀行考査局（1937）,3）とあり、少額の料金支払い口座利便性を通じて俸給生活者らを預金者に取り込んだ。

二回目の1937年の日本銀行考査では、日本昼夜銀行の経営状況は好転した。1937年2月20日現在、預金は1億1,500万円で、日本銀行は「従来ノ不安状態ヲ脱却シテ相当手許ニ余裕ヲ生スル」（日本銀行考査局（1937）,2-3）とした。貸出は6,641万円の内、浅野向け3,270万円、安田向け1,267万円であり、日本昼夜銀行の全貸出に占める割合は68%に低下した（日本銀行考査局（1937）,5）。浅野と安田向けの貸出はほぼそのまま残っていたが、浅野と安田向け以外の貸出が増え、その割合は減った。有価証券への投資は4,780万円となり、預証率が上昇した（日本銀行考査局（1937）,12-13）。

損益状況では、1932年の考査時との違いは株や商業手形などの担保をとり、債権の保善に努力した点である（表10）。浅野関連への融資も事業が好転して利益が出るようになり、1932年の日本銀行考査の査定では約1,800万円の損失が見込まれていたが、担保の株価が上昇し損失の見込みはほぼ解消された。「不良見込」は貸出先が危ないことを示し、「欠損見込」は担保を処分してもマイナスが出る場合に計上した。「無担保」はリスクの低い貸出先を示し、貸出額の規模は大きくはなかった。「欠損見込」は傘下企業に投資を行う浅野の持株会社「浅野同族」などごく一部に限られ、長年の浅野の不良債権問題は解決に向かった。「日本銀行は「当行ノ内容ヲ一新セシメタルモノト云フヘシ」（日本銀行考査局（1937）,5-6）と評価し

---

<sup>26</sup> 預金増加は他行の吸収合併の影響も大きく、1923年から1942年までの動向は以下の通り。安田銀行は、1924年に浜松商業銀行、1928年に毛利銀行を合併した（富士銀行調査部百年史編さん室編（1982b））。安田貯蓄銀行は、1924年に福岡貯蓄銀行を合併した（協和銀行史編集室編（1969））。日本昼夜銀行は、1931年古河銀行（一部）、1942年に三十六と武陽の両銀行を合併した（富士銀行調査部百年史編さん室編（1982a））。預金の増加率が一番高い肥後銀行は、1928年に肥後共同、1938年に芦北、1942年に井芹、小国、八代共栄の各銀行を合併した。（肥後銀行企画室年史編集班編（1977））

た。5%配当も余裕がある状況となった。ただし、浅野への融資が固定した状態は続き「唯当行ノ経営収益カ専ラ浅野同族貸出収入ニテ調節セラレ居ル状況ノ好マシカラサルハ勿論ナリ」（日本銀行考査局（1937）,6）と経営は浅野の事業の浮き沈みに掛かっているとした。

表 10：日本昼夜銀行の大口融資先（1937年2月20日現在,単位は千円）

	貸出額	不良見込	担保(株)	欠損見込
<b>安田系関係貸出</b>	12,674	6,000		0
安田保善社	11,300	5,300	15,056	0
安田彦四郎	292	0	405	0
安田商事	200	0	301	0
日本酸素	882	700	3,000	0
<b>浅野系関係貸出</b>	32,704	29,912		50
浅野同族	28,717	28,717	37,489	0
順安砂金	1,091	1,091	2,400	0
浅野石材工業	54	54	61	見送り
日本鑄造	38	0	全部商手	0
藤堂大蔵	70	0	152	0
白石同族	2,056	0	4,158	0
日本鋼管	546	0	全部商手	0
昭和鉱業	82	0	商手	0
日支炭礦汽船	50	50	113	50
<b>その他大口不良貸出</b>				
南俊二	408	408	372	49
大阪劇場、矢鳥組	368	368	2,062	18
中央青果卸売	318	318	保証	0
<b>無難なる大口貸出</b>				
ビルプロカーに関する貸	3,198		株式、手形	
野間清治	2,051			3,128
望月乙彦	744		手形、241	
東京府市場協会	254		信用	
神田市場信用利用組合	200			220
大井伊助	180			180

出所) 日本銀行考査局「実地調査報告 日本昼夜銀行」(1937),32-84.

戦時期の日本昼夜銀行は1942年に第三十六銀行と武陽銀行を吸収合併した(富士銀行調査部百年史編さん室編(1982a),541)。小口信用貸付は1943年に日本昼夜銀行が安田銀行に吸収合併されるまで続いた(安田保善社とその関係事業史編集委員会編(1974),814)。安田銀行の支店となった旧日本昼夜銀行の支店では合併後も昼夜営業を継続されたが、戦時下の空襲に備えた灯火管制下と人手不足から二部制維持が困難となり、同年末には安田銀行の一般支店と同様の午後4時までとなり昼夜営業を終えた(富士銀行調査部百年史編さん室編(1982a),553)。戦時期になると物資の不足から配給制や切符制になるなどして、消費活動は大幅に制限されたことは知られている。都市の中間層向けの金融ビジネスに取り組んだ日本昼夜銀行の行名と特徴ある二つの金融サービスも戦争の中に消えていった。

## 5. その後の庶民金融への影響と日本昼夜銀行の含意

日本昼夜銀行の取組みは他行への影響もあり、新中間層と中小商工業向けの小口信用貸付

を始める銀行も現れた。三菱銀行は 1936 年、東京郊外に支店があり、中小商工業者を取引相手にしていた金原銀行株の 9 割を取得し、新規顧客開拓のため無担保での中小商工業と新中間層向けの融資を開始した（三菱銀行史編纂委員会（1954）, 257-262）。貸出条件は日本昼夜銀行に類似し<sup>27</sup>、三菱銀行ではなく傘下の金原銀行で行った点も、安田傘下の日本昼夜銀行と同じであった。一方で、中小商工業融資のみに参入する銀行もあった。1933 年当時三井銀行は大手他行に比べて店舗数が少なく（24 店舗）を経営陣は問題視した。大都市周辺や中級都市での中小企業に成長の見込みがあるとして、1938 年に新宿・池袋・目黒支店を置き、融資を実施した（三井銀行八十年史編纂委員会（1957）, 260-270）。第一銀行も、1938 年に渡辺銀行を譲渡され、鶴見や川崎の工業地帯に新支店を置き、融資に進出した（第一銀行八十年史編纂室（1958）, 205-223）。1930 年代半ばは昭和恐慌後の低金利時代で、各行は支店を増やして預金吸収を図り、既存の大口融資に加えて新規の融資先を見出そうとした。

小口信用貸付のニーズはあったが民間の金融機関が営利で行うには限界があり、1936 年に組合組織を通じた中小商工業者の育成のために、商工組合中央金庫が設立された。戦時体制になると、国民生活の維持と人心安定が急務となり、一般の中小商工業者や俸給生活者向けの事業並びに消費資金の円滑化の重要性が再認識され、1938 年に庶民金庫が設立された。貸付限度額や貸付利率を記した小口貸付の規定は、先行した銀行のサービスと酷似していた。全額政府出資の非営利法人で、営業費は国補助もあり、事務手続きは簡易で、最初の一年間で貸付件数は 19,000 件を超えた（国民金融公庫調査部編（1959）, 1-21）。庶民金庫は戦後に国民金融公庫となり、現在は国民生活金融公庫となっている。

戦時期には、無尽会社の合併にも大手銀行が関わった。1942 年の近畿無尽には住友銀行が関与（近畿相互銀行 20 年史編集室編（1963）, 527-529）し、野村銀行も 1944 年にできた西日本無尽に経営参加した（西日本相互銀行総合企画室（1965）, 63-82）。国は大銀行が背後にあることの安心感を求めた意向もあったが、巨大銀行側も庶民金融を傘下に持つメリットを感じていた。背景には、都市の発展と都市生活者の増加に伴う無尽会社の成長があり、そうした金融市場を手中に収めることが、金融グループの成長につながると考えていたからであろう。

戦間期に日本昼夜銀行が行った支店網の拡大や小口信用貸付、巨大銀行グループが庶民金融にも力を入れて金融サービスの大衆化を進めた動きは、戦時期の統制経済で一時の中断を余儀なくされる。しかし、戦後の高度経済成長期には、都市銀行でも類似した展開があり、積極的に新規の支店を設置し、個人向けローンに進出したりすることへの遠因となった。高度経済成長期の日本経済は、旺盛な設備投資を背景に、特に法人企業部門は資金不足状態にあった。一方で、個人部門は大幅な資金余剰を抱えて、貯蓄超過状態にあり、金融市場への資金の供

---

<sup>27</sup> 「金原銀行でも月給取りに御用達」, 『大阪毎日新聞』, 1936 年 9 月 4 日。

給部門になった。経済成長に伴う国民所得の増大は、日本に大衆消費社会を到来させ、都市銀行はオーバーローンと大口取引偏重を解消するため、昭和 30 年代中頃から大衆化路線を進めた。発展が期待される地域に新規出店を行い、給与振込や各種料金支払い決済ができる「総合口座」や定期積立財形天引きを拡充した。消費者金融にも力を入れ、住宅ローンを始め、自動車、家電、ピアノ、旅行などの無担保個人向けローンも登場して、ローンの多様化と量的拡大が進んだ（三菱銀行調査部銀行史編纂室（1980）,318-347）。低成長時代に入ると、法人企業の資金需要が低下し、金融機関は転換に迫られた。特に個人消費では昭和 40 年代の中頃から住宅投資が拡大した（日本銀行金融研究所編（2000）,512）。それでも、三井銀行では総貸出に占める消費者金融の割合は 0.7%（1968 年 3 月末）に過ぎず、その 44.7%は住宅ローンであった（朝倉孝吉（1978）,210-211）。大衆消費社会が到来した高度経済成長期でも都市銀行の消費者金融の割合は微々たるものであり、戦間期の日本昼夜銀行の小口信用貸付がさほど低かったともいえず、銀行の無担保個人向け融資は制約が大きかったことをうかがわせる。

## おわりに

本稿では、安田傘下入り後の日本昼夜銀行の経営状況を明らかにした。日本昼夜銀行は元浅野傘下の機関銀行で、浅野向け貸し出しの不良債権化により業績不振に陥り、1922 年に浅野総一郎と安田善次郎の個人的な関係を頼りにして、安田傘下入りした。翌年の安田の大合同では対象から除外され、1943 年に安田銀行に吸収合併されるまで存続した。

1932 年の日本銀行の考査は、昭和恐慌の影響もあり、預金が減少するなど経営状態が最も厳しい時期であった。安田傘下入りから 10 年経過しても浅野関連の不良債権は残り、機関銀行の体質から脱却できずにいた。浅野向け貸し出しの割合の高さと欠損見込の多さに指摘を受けた。

一方で、1928 年上期を契機にして、貸出金利回りと調達金利の両方が低下する事態を受けて、預金を多く集めて資産規模を拡大し、貸出や運用金額の量的拡大で収益を上げるビジネスモデルに転換を図った。預金吸収を進めるために支店を新設する一方で、浅野時代からの昼夜営業を継続した。安田のブランド力を背景にして、預金は大幅に増加したが、不景気や他の金融機関との競合から貸出は増えず、むしろ安定的な収益が見込める国債を中心とした有価証券への投資が増えて、預貸率の低下と預証率の増加を招いた。

戦後の普通預金に相当する特別当座預金の割合が高まり、東京を地盤とする日常の金銭を扱う銀行として利用されるようになり、経営幹部は都市の中間層への更なる利用拡大や自行の独自色を出したサービスを目論んだ。アメリカの銀行サービスを模して 1930 年に始めたのが、俸給生活者と中小商工業者向けに無担保で融資する小口信用貸付であった。顧客側は、公共料金の支払いにも使える小口預金として利便性が高く預金獲得にも寄与し、リテールビジネスの促進に繋がった面があった。銀行側も、無担保のために貸出審査を厳格にせざるを

得ず、一件ごとの審査コストがかかったことも影響し、貸出残高の伸びは限定的なものに留まった。日本昼夜銀行の取り組みは、安田財閥の中心である安田銀行で行うことはなかった。その一方で、都市の中小銀行の中には、同様の取り組みを進める金融機関もあり、それは都市中小銀行の生き残り戦略の一つであったと考えられる。

日本昼夜銀行の業績は、高橋財政期の景気回復による預金の伸びと軍需に支えられた浅野関係貸出の正常債権化により、1933年から急回復して滞貨金償却が進んだ。預金規模は安田傘下行の中で3番目となり10年程度で収益を上げられる銀行として再生した。1937年の二回目の日本銀行審査では、預金の増加や浅野向け融資の損失見込みが解消された点が評価されたが、浅野や安田向けの貸出が大半を占める融資構造には大きな変化はなかった。

東京を地盤とした都市中小銀行の多くは戦時期の大銀行への吸収合併により大半が消えてしまうが、日本昼夜銀行が戦間期に大衆向けの金融サービスを展開し始めて、戦時期まで継続したことには、戦後の都市銀行の大衆化路線をとった意義が考えられる。

本稿では、消費者としての戦間期の新中間層を知る上で、サービスを提供する企業側の対応の一事例として日本昼夜銀行の分析を試みたが、新中間層向けの多様なビジネス展開という課題の解明は今なお残されている。

## 参考文献

- 浅井良夫（1976）「地方金融市場の展開と都市銀行—岐阜県下大垣共立・十六両行を中心として」『地方金融史研究』7,51-76。
- 浅井良夫（1982）「安田貯蓄銀行と安田財閥（齋藤正教授追悼号）」『成城大學經濟研究』77,325-395。
- 浅井良夫（1993）「安田銀行」「安田財閥」「安田善次郎」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典（第十四卷）』吉川弘文館,55-58。
- 朝倉孝吉（1978）『銀行經營の系譜——不動産担保金融とオーバーローン』日本經濟新聞社。
- 足利銀行調査部編（1985）『足利銀行史』足利銀行。
- 麻生誠（2009）『日本の学歴エリート』講談社。
- 天野郁夫（2005）『学歴の社会史—教育と日本の近代』平凡社。
- 井奥成彦・鎮目雅人（2014）「近代日本の庶民金融—東京市芝区 T 質店の研究」『社会經濟史学』80（3）,291-296。
- 石原武政・矢作敏行編（2004）『日本の流通 100 年』有斐閣。
- 今城徹（2001）「戦間期における五大都市中小商工業金融の特徴—中小商工業者と金融機関の取引関係を中心に」『大阪大学經濟学』51（3）,97-113。
- 伊牟田敏充（1980）「日本金融構造の再編成と地方銀行」朝倉孝吉編『両大戦間における金融構造』お茶の水書房,3-114。
- 大垣共立銀行編（1997）『大垣共立銀行百年史』大垣共立銀行。
- 大蔵省昭和財政史編集室編（1954）『昭和財政史 第 6 卷 国債』東洋經濟新報社。
- 粕谷誠（2021）「川崎銀行と第百銀行の発展と経営危機への対応—三菱銀行への合併前史」『三菱史料館論集』22,31-44。
- 門脇厚司（1988）「新中間層の量的変化と生活水準の推移」日本リサーチ総合研究所編『生活水準の歴史的分析』,213-249。
- 川崎清男（1959）『慈烏夜啼』慈烏夜啼刊行会。
- 木村涼子（2010）『主婦の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館。
- 協和銀行史編集室編（1969）『協和銀行史』協和銀行。
- 近畿相互銀行 20 年史編集室編（1963）『近畿相互銀行二十年史』近畿相互銀行
- 楠見一正（1930）「俸給生活者に就て」『經濟時報』1（11）,33-46。
- 国民金融公庫調査部編（1959）『国民金融公庫十年史』国民金融公庫。
- 小島庸平（2015）「戦前日本の都市家計に対する小口信用資金の供給主体—1930 年代の東京市を中心に」『經濟学論集』80（1-2）,91-109。
- 後藤新一（1970）『日本の金融統計』東洋經濟新報社。
- 小早川洋一（1981）「浅野財閥の多角化と経営組織」『經營史学』16（1）,42-64。

小早川洋一（1985）「安田善次郎死後の安田財閥の再編成・結城・森改革の過程と意義について」『経営情報学部論集』1（1）,27-42。

齋藤憲（2002）「浅野昼夜銀行の安田財閥への譲渡」『経済史研究』6（0）,83-99。

坂井正（1927）『銀行預金実務』銀行問題研究会。

四国銀行百年史編集室編（1980）『四国銀行百年史』四国銀行。

時事新報社経済部編（1931）『小口金融の利用法』春陽堂。

鎮目雅人（2023）「金融政策と国債管理—近代日本の経験から」『金融経済研究』46,52-70。

渋谷隆一（1979）『サラリーマン金融の実証的研究』日本経済評論社。

神野由紀（1994）『趣味の誕生—百貨店がつくったテイスト』勁草書房。

第一銀行八十年史編纂室（1958）『第一銀行史 下巻』第一銀行八十年史編纂室。

高嶋雅明（1984）「正隆銀行の分析・満州における日清合弁銀行の設立をめぐる」『経済理論』198,1-25。

武田晴人（1999）『日本人の経済観念』岩波書店。

千葉銀行調査部編（1975）『千葉銀行史』千葉銀行。

帝国興信所日報部編（1929）『財閥研究第1輯』帝国興信所。

帝国時事通信社編（1929）『大日本人物史（昭和5年度版 増訂版）』帝国時事通信社。

寺西重郎（1982）『日本経済の発展と金融』岩波書店。

東京興信所編『銀行会社要録』各年。

東京市編（1933）『東京市商工名鑑 第5回』ジャパン・マガジーン社。

東京市電気局（1930）『東京市電乗客交通調査 昭和四年度乗客調査実績概要』東京市電気局。

富永静雄（1935）「中小産業者金融ニ対スル若干ノ考案」東京市役所『中小商工業者振興調査会資料第2 中小商工業者の金融問題（金融機関から見たる）』東京市役所。

西日本相互銀行総合企画室（1965）『西日本相互銀行二十年史』西日本相互銀行。

日本銀行調査局編（1963）『日本金融史資料 昭和編 第七巻』大蔵省印刷局。

日本銀行調査局編（1969）『日本金融史資料 昭和編 第二十五巻』大蔵省印刷局。

日本銀行（1983）『日本銀行百年史 第5巻』日本銀行。

日本銀行金融研究所編（2000）『新しい日本銀行—その機能と業務』有斐閣。

野田正穂・中島明子編（1991）『目白文化村』日本経済評論社。

服部一馬（1979）「浅野財閥」「浅野総一郎」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典（第一巻）』吉川弘文館,138-140。

早川大介（2020）「安田財閥と地方銀行の系列化—八王子・第三十六銀行を事例に」『成城大學経済研究』230,75-99。

肥後銀行企画室年史編集班編（1977）『肥後銀行五十年史』肥後銀行。

- 廣田誠（2007）『近代日本の日用品小売市場』清文堂。
- 福岡銀行（1969）『福岡銀行二十年史』福岡銀行。
- 富士銀行調査部百年史編さん室編（1982a）『富士銀行百年史』富士銀行。
- 富士銀行調査部百年史編さん室編（1982b）『富士銀行百年史 別巻』富士銀行。
- 松下伝吉（1937）『財閥安田の新研究』中外産業調査会。
- 満菌勇（2014）『日本型大衆消費社会への胎動—戦前期日本の通信販売と月賦販売』東京大学出版会。
- 三井銀行八十年史編纂委員会（1957）『三井銀行八十年史』三井銀行。
- 三菱銀行史編纂委員会（1954）『三菱銀行史』三菱銀行史編纂委員会。
- 三菱銀行調査部銀行史編纂室（1980）『続三菱銀行史』三菱銀行。
- 宮地英敏（2018）「昭和金融恐慌下における十七銀行の状況と安田銀行」『経済学研究』85(4),29-40。
- 迎由理男（2012）「安田財閥の対外投資-正隆銀行経営を中心に」『北九州市立大学商経論集』47(1・2),15-50。
- 安田保善社とその関係事業史編集委員会編（1974）『安田保善社とその関係事業史』安田保善社とその関係事業史編集委員会。
- 山室宗文（1926）『我国の金融市場』日本評論社。
- 和田博文（2011）『資生堂という文化装置 1872-1945』岩波書店。
- 由井常彦編（1986）『安田財閥』日本経済新聞社。
- 由井常彦（2010）『安田善次郎—果報は練って待て』ミネルヴァ書房。

#### 一次資料

- 浅野昼夜銀行『営業報告書』各期。
- 大蔵大臣官房第三課編『銀行総覧』大蔵大臣官房第三課,各年。
- 東洋経済新報社編『東洋経済経済年鑑』東洋経済新報社,各年。
- 日本銀行考査局（1932）『実地調査報告 日本昼夜銀行』日本銀行金融研究所蔵。
- 日本銀行考査局（1937）『実地調査報告 日本昼夜銀行』日本銀行金融研究所蔵。
- 日本昼夜銀行（1923）『当行沿革 日本昼夜銀行』。
- 日本昼夜銀行（1936）『営業案内』。
- 日本昼夜銀行『営業報告書』各期。